（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	奈良県	番号	２９

推進地区名	協力校名	児童生徒数
五條市	五條市立北宇智小学校	１１８
五條市	五條市立野原小学校	１３３
五條市	五條市立五條中学校	１１５
御所市	御所市立御所小学校	２７５
御所市	御所市立御所中学校	２３７
宇陀市	宇陀市立榛原小学校	３１３
宇陀市	宇陀市立菟田野小学校	１３６
宇陀市	宇陀市立菟田野中学校	９４
平群町	平群町立平群小学校	３３０
平群町	平群町立平群中学校	４３４

○　実践研究の内容

１．推進地域における取組

本県では学力向上に資する施策として、これまでから学力の定着に課題を抱える小中学校をもつ市町村を指定し、学力向上に係る取組を支援してきた。平成３０年度は、希望のあった３市１町の６小学校と４中学校を指定することとした。６月２２日に、奈良教育大学　小柳和喜雄教授を会長に、県教育委員会、推進地区及び協力校の代表者で組織する学力向上実践研究推進協議会を設置し、本年度の取組の方向性について協議した。８月１日に文部科学省から本事業の委託を受け、この日から、本事業の趣旨に基づいて本県の学力向上事業を展開することとなった。

本事業の実施に当たり、全国学力・学習状況調査等に見られる本県の課題である「児童生徒の学習意欲や学力の向上」、「教員の指導力の向上」、「基本的な生活習慣、学習習慣の定着」について、その改善を図るために各推進地区や協力校の実態に応じた取組を推進すると同時に、各推進地区や協力校の要請に応じて指導主事を延べ６６回派遣し、必要な支援を行った。

また、本県の学力に関する課題と今後の指導改善の方向性を示すため、１２月１４日に、県内全ての小中学校の管理職や各市町村教育委員会の指導事務担当者を対象とした教育課程説明会を開催した。当説明会では、県教育委員会の担当者から、全国学力・学習状況調査を活用した学力向上の取組について説明するとともに、大阪教育大学連合教職大学院　田村知子教授を講師に招き、教育課程を軸に学校全体で教育の質の向上に取り組むカリキュラム・マネジメントについての講演を行った。

平成３１年１月２４日に第２回学力向上実践研究推進協議会を開催し、本年度の取組の成果と課題を共有するとともに、次年度に向けた取組について協議した。

さらに、２月１５日には、本事業の成果や好事例の周知を図ることを目的として、県内の小中学校の教員等計２０３名の参加を得て、奈良県学力向上フォーラムを開催した。本フォーラムでは、本事業推進地区を代表して、御所市教育委員会の辻内指導主事から、学力向上を支援する取組について報告いただいた。また、協力校を代表して、宇陀市立榛原小学校の井上校長からユニバーサルデザインの視点を取り入れた学力向上の取組について報告していただくとともに、奈良教育大学　小柳教授に、学習指導要領の変遷と本県の学力向上の取組と今後の方向性について講演いただき、本事業の総括とした。

２．推進地区における取組

（１）五條市の取組

小中学校の９年間の学びを踏まえた研究体制を市全体で組織し、全国及び市独自で実施する学力・学習状況調査を指標とした学力向上に資する研修会を実施したり、市教育委員会の指導主事が各学校に対し、学力向上の取組状況について指導助言を行ったりした。また、教員の指導力の向上に資する取組としてミドルリーダーの養成や、年５回の「教師塾」を実施するなどの支援を行った。

（２）御所市の取組

市全体で学力向上に取り組む意識を高めるフォーラムを開催するとともに、優れた授業実践をイントラネットで共有し、教員の指導力向上に努めた。また、家庭教育の手引を作成し、保護者に配布したり、地域の人的資源を活用した補充学習を行ったりするなど、各学校の授業以外で学習環境の充実に努めた。

（３）宇陀市の取組

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた、どの子供にも分かる授業づくりを研究課題として取り組んだ。目指す授業の姿を「UDA スタンダード」として示し、市教育委員会の指導主事が全ての学校に対し、全国及び市独自の学力・学習状況調査などを指標として指導助言を行うなど、教員の指導力向上に努めた。また、家庭学習の手引を作成し、家庭への啓発や、モデル校を指定し、放課後学習の支援を行うなど、学校の授業以外で学習環境の充実に努めた。

（４）平群町の取組

指導主事等の計画訪問による指導助言に加え、学力・学習状況調査結果分析報告会を開催し、町全体で学力向上に係る取組の成果と課題を共有した。また、夏期休業中に子供の学習意欲を高める教材例の交流会を実施し、学力向上に組織で取り組む体制を構築している。特

に本年度は、学習成績が下位層にある児童生徒の学力向上について研究を行った。

３．協力校における取組

（１）五條市立北宇智小学校の取組

読解力の向上と基礎学力の定着を目指して、読書活動の充実を図るとともに、教科書を主な教材として、内容を正確に読み取ることができる児童を育成するための研究などに取り組んだ。

（２）五條市立野原小学校の取組

読解力の向上と主体的な学習態度の涵養を目指して、図書館司書と連携し、読書活動の充実を図るとともに、思考の過程を振り返ることができるノートの活用法等についての研究などに取り組んだ。

（３）五條市立五條中学校の取組

自尊感情の涵養によって学習意欲の向上を図る取組を学校全体で行った。その基盤となる基礎的・基本的な学力の定着を目指して、習熟度に応じた課題を提示したり、放課後や「土曜塾」などの実施により学力補充を行ったりするなどした。

（４）御所市立御所小学校の取組

学校の教育目標を達成するために、授業力向上、基礎学力向上、外国語活動推進の３つのグループを編制し、組織的な学力向上の取組に努めた。特に基礎学力の向上に当たり、始業前や放課後に独自の学力補充の時間を設定し、計画的に実施するなどした。

（５）御所市立御所中学校の取組

学習規律の改善を図るとともに、生徒が主体的に見通しをもって学習に取り組めるように学習目標を明示し、振り返って次の学習につなげる学習活動を意識した授業改善を目指した。また、放課後や長期休業の時間を活用して学力補充などに取り組んだ。

（６）宇陀市立榛原小学校の取組

ユニバーサルデザインの視点に基づき、算数科における主体的、対話的で深い学びの実現に向けた研究に取り組んだ。具体的には、ペア学習やグループ学習を効果的に位置付けたり、問題文を正確に読み取る力を育成するために読書活動の充実を図ったりするなどした。

（７）宇陀市立菟田野小学校の取組

自分の考えを明確に表現する児童の育成を目指し、朝の短時間学習を活用して全校一斉読書や１００マス作文に取り組んだり、ペア学習やグループ学習を効果的に取り入れた授業改善等に学校全体で取り組んだりした。また、放課後の時間を活用した補充学習にも努めた。

（８）宇陀市立菟田野中学校の取組

低学力傾向の生徒の解消を目的として、生徒同士が学び合う協働的な学習を計画的に取り入れた授業研究を行うとともに、自主学習ノートを通した家庭学習の充実や地域の人的資源を活用した「うたの土曜塾」などを実施してきた。

（９）平群町立平群小学校の取組

学習規律の確立及び児童の自尊意識の向上を目指した学習指導の工夫について取り組んだ。教員相互で授業参観することなどを通して、教員の指導力向上に努めた。また、家庭学習の大切さを保護者に啓発するとともに、児童の家庭学習の状況の把握に努めた。

（10）平群町立平群中学校の取組

生徒の学習意欲を高めるために、学ぶ楽しさや分かる喜びを感じ取ることのできる授業づくりの工夫についての研究に取り組んだ。その手立てとして、ＩＣＴの活用や生徒相互で学び合う学習活動を計画的に取り入れるなどした。

○　実践研究の成果

１．協力校における取組の成果

各協力校における取組は，児童生徒や地域の実態に応じて異なるものの、教員が組織的に課題に向き合い取り組んでいたことが成果として挙げられる。さらに、放課後や長期休業の時間を活用し、基礎学力の向上を目的とした学力補充を実施したり、自ら学ぶ力を育むこと目的に作成された「家庭学習の手引」を配布し、学習習慣の定着を図ったりするなどの取組が目立った。

２．実践研究全体の成果

各推進地区及び協力校において、学力向上に向け、市町村教育委員会がリーダシップをとって地域全体、学校全体で組織的に取り組むとともに、家庭・地域で目指す子供像を共有することを大切にしながら取組を展開したことが大きな成果である。これは、新しい学習指導要領に示されたカリキュラム・マネジメントや社会に開かれた教育課程の理念の実現を図る取組といえる。

３．取組の成果の普及

学力向上のための取組を広く県内に普及し、本県教育の質の向上を図るため、学力向上フォーラムを開催し、推進地区及び協力校の取組を県内に広く周知した。

○　今後の課題

本年度は、本県の学力に関する課題の改善に資するため、各推進地区及び協力校の実態に応じて取り組んだ結果、様々な実践が報告された。限られた期間の中での研究ではあったが、どの取組がどの課題に対してどのように有効に働いたのか、また、有効に働かなかった場合は、その原因はどこにあるのかといった視点での検証が十分でないところがあった。

次年度については、本年度の推進地区及び協力校の成果と課題を踏まえた上で、各推進地区及び協力校において、学力向上に向けて最優先で取り組むべきことは何かを明確にした上で、研究内容を精選し、その成果について計画的、継続的に検証を行う必要性を感じる。その上で、成果が見られた取組について授業公開を行ったり、学力向上フォーラムや印刷物及びＷｅｂなどで周知を図ったりして共有することなどにより、本県の児童生徒の学力向上を推進していきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	奈良県	番号	２９

推進地区名	五條市

○　推進地区として実施した取組内容

１．研究課題

平成 29 年度の全国学力・学習状況調査の分析結果から、本市では言語能力における読解力の弱さがみられる。例えば、「作者は何が言いたいのか」といった、文章全体から正しく読み取る力に課題があり、この課題解決に向けた取組を検討し、様々な学習場面で提案・実践しているところである。また、中学校における家庭学習習慣では、家庭で学習を「する子」と「しない子」の二極化が見られる。宿題はするが、自ら課題を設けて学習できる生徒は少ないのが現状である。一方、教員の授業力の向上として問題解決型授業プランシートを作成し、活用シートに基づいた授業実践の推進を図ってきたことで、「めあて」や「ふり返り」を位置付けた授業スタイルはできてきたが、教材に対する考え方、子どもの発言等の分析や、教科の枠をこえて、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の構築はこれからである。

そこで、確かな学力の育成のために、９年間の子どもの育ちと学びの連続性を重視した「つながる教育」を推進するために、教員の授業力の向上のための方策と、子どもの知識の定着及び深化のための方策を今年度の研究課題とした。

２．研究課題への取組状況

小学校では、年度当初に、国語か算数の１つの教科に焦点を絞って授業研究し研修を行った。研修では、1 つの教科に絞った授業研究でその教科について深く学ぶ以外に、その研修が他教科の力にもつながることや、先生方の授業力向上になることを指導した。また、文章を正確に理解して読むことを意識した授業を国語だけでなく全ての教科において行う必要性やその方法について助言した。また、研究授業には県や市の指導主事が出向けるようにし授業についての指導助言を行い授業力の向上に努めた。

中学校では、教科担任制であるが、その教科の枠を超えて共通の観点で研修を進めることや、職員がチームとなって授業を検討し、家庭学習に取り組むことなど校内での研修の進め方について指導助言を行った。

市の学力向上推進委員会並びにそこに所属する小中の研究主任が集まり、研修の方向性について検討し合い、学校での困りごとなどを相談し合えるような、中学校区で教員がつながる交流の場を設けている。

【学力向上研修会の開催】

全国学力・学習状況調査や県・市独自で行っている学力・学習状況調査は、小学校４年生～中学３年生までの児童生徒の状況を網羅している。その学力調査の結果を専門家に分析依頼している。市内小・中学校の教員を対象に、１０月と２月に研修会を実施した。第１回目は、大学講師による分析内容や取組の提案を行い、第２回目は、同じ講師に、より詳しい分析結果と学力向上プロジェクトからの提案を組み合わせ、第１回目より出席する参加者の範囲を広げて行った。

【学力向上プロジェクトの運営】

市内のミドル教員によって構成される学力向上プロジェクトを運営し、ここでは、学力向上に関して自由に考えたことを提案している。今年度は、子どもの学習意欲の向上に焦点を当て、「学びの楽しさ」について追究することとし、その結果を各校に提案した。また、PC 上に作成している市内共有フォルダ「お役立ち情報局」の活性化について考え、個々の教員が使いやすいようにリニューアルし、各校の指導案や取組等の情報提供をしやすくすることで授業等が充実するように工夫した。

【学力向上ヒアリングの実施】

市内各校が学力についての分析と取組を市教育委員会と共有し、共に方向性を考える機会として、各校ごとに学力向上ヒアリングを行った。ヒアリングでは、学力向上の先進地視察で学んだ内容を伝達する場を設け、各校での学力向上の取組の参考になるようにした。今年度は、ヒアリングの時期を 10 月に設定し、各校の取組の中間見直しととらえ、その後改めて１月に進捗状況を聞き、相談に乗る機会を設け、PDCA サイクルを短いサイクルでまわし、次年度の教育課程の改善に活かせるようにした。

【先進地視察の実施】

教員自らが、学力向上先進地に出向いて授業を見たり、先進校の研究主任から取組の様子を聞いたりする機会を設けた。実際に現地を訪れることで、広い視野で自分たちの取組を見直すきっかけとなった。また、学んできたことを報告冊子にまとめ、各校で共有できるようにした。

【保護者啓発パンフレットの作成】

全国学力・学習状況調査の結果を分析した結果や全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果、子どもの成長と学び変化などを載せた保護者啓発パンフレット「五條市の子どもたちに『確かな力』を育もう」を今年度も作成し、市内保育所・幼稚園・小学校・中学校の全保護者や地域の方々に年度末に配布し啓発を行った。

【小中９年間を見通した『つなぐ　つながる　カリキュラム（五條市版９年間のカリキュラム）』の作成と活用】

標記カリキュラムは、平成 29 年度に本市の教科等研究会各教科部会が検討して作成した。このカリキュラムを研究授業を行う際に活用して、９年間の学びの連続性を意識した授業実践を行った。現在、平成 29 年度告示の学習指導要領解説に合わせて見直しを行っており、これらのことを

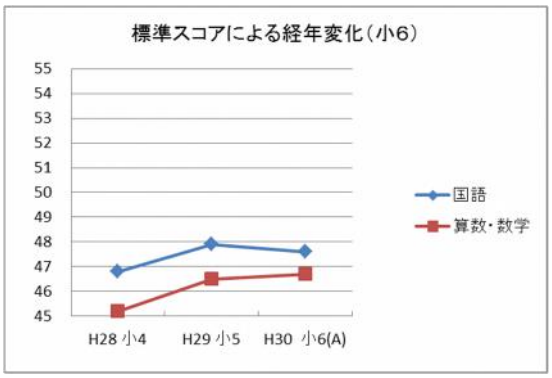
通して小中の各教科部会のつながりを意識するようにしている。

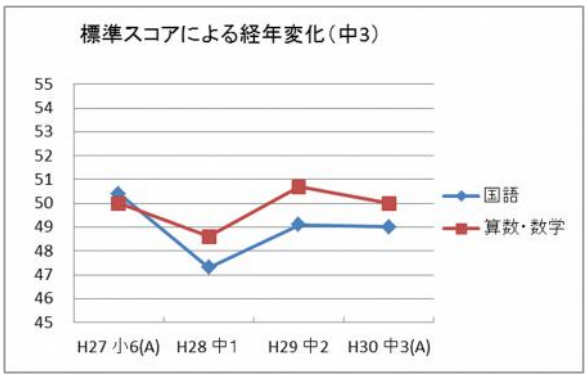
【授業力・教師力向上のための Good　Job アカデミー（教師塾）の開催】

授業力や教師力を向上させるため、現場の教員の自主運営のもと、本年度も年間５回の「Good Job　アカデミー」を実施した。本年度は、「ICT で授業改善のコツ」「授業づくりで子どもが伸びる、教師が育つ、学校が変わる」「発達が気になる子どもの特徴の共有について」「求められる学力について」等のテーマを設けて研修を行い、延べ 150 名の教員が参加した。また、この Good Job　アカデミーは、小中学校の教員の情報交流の場ともなり、若手教員にとっても貴重な学びの場となっている。

３．実践研究の成果の把握・検証

（全国学力・学習状況調査の国語 A・算数（数学）A 及び県・市の学力調査（全国を５０とする））





市では、平成 25 年前から全国以外に県や市が実施する標準学力調査を小学校４・５年生と中学１・２年生に実施している。上のグラフは、平成 30 年度の小学６年生と中学３年生の全国を５０とした標準スコアによる経年変化を表している。問題の難易度や調査を受けた母体数が違ってはいるものの、小学６年生では算数が上昇している。また、中学３年生は中学１年生の時に一旦下がったが持ち直している。

（教員アンケート）

アンケート項目 ※回答は良く出来たと答えた割合（%）	小学校		中学校	
	６月	１２月	６月	１２月
「教科の枠を超えた（中学校）」または、「他学年（小学校）」の授業参観をしましたか。	５０	７３	３８	４７
校種間（小⇔中）を超えた授業参観をしましたか。	３１	５５	２９	４７
子どもたちが問題が分からないとき、あきらめずにいろいろな方法を考えさせましたか。	４２	５７	３５	３２
各教科で教科書の文章が読み取れる力を子どもたちにつけるため、意識して授業しましたか。（正確な読みの力）	２７	４２	３２	３３
将来就きたい仕事（夢）などについて考えさせる指導をしましたか。	１７	１０	３１	２１
家庭学習の取組として、子どもに家庭での学習方法を具体	５３	６３	３２	４０

例をあげながら教えましたか。				

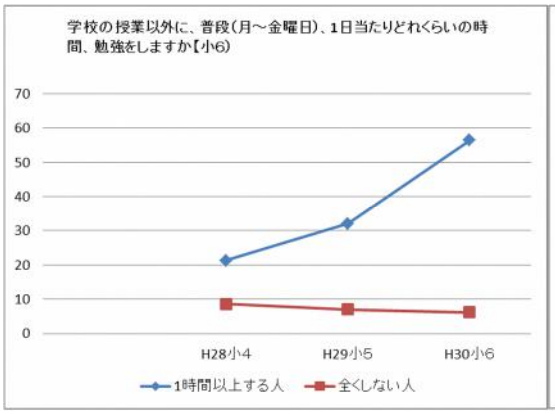
また、市独自で、6 月と 12 月に教員と児童生徒に対して同じアンケートを実施した。上の表に見られるように教員アンケートでは、小中とも、授業改善に向けた取組についてよく出来たと答えた割合が６月より高くなっている。また、家庭学習の取組や、学力調査の結果を教員全体で共有するという取組の姿勢もよく出来た割合が高くなっている。一方、将来就きたい仕事（夢）などについて考えさせる指導は、あまり意識されていないことが、課題として上がっている。

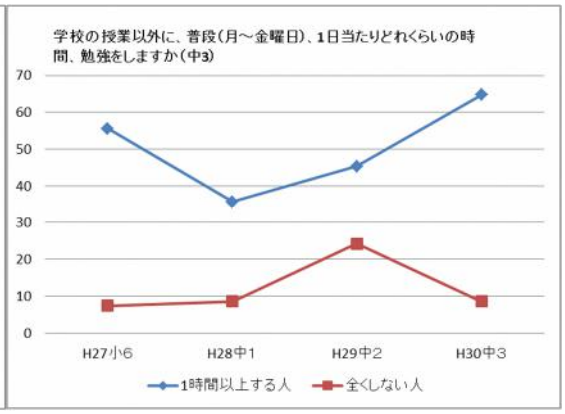
（児童生徒アンケート）

アンケート項目 ※回答は肯定的に答えた割合	小学校		中学校	
	６月	１２月	６月	１２月
国語の勉強は好きだ	６５	７０	５５	５８
算数の勉強は好きだ	７３	７０	６３	５２
学校の宿題をしている	９７	９５	８０	８７
学校の授業の予習をしている	６１	６０	３６	３０
学校の授業の復習をしている	７５	７２	５９	５８
自分で計画を立てて勉強している	７２	７１	４８	４９
将来つきたい仕事や夢がある	５３	６３	３２	４０

児童生徒アンケートは上の表のような結果となった。前年度も同じようなアンケートで１２月の方が６月より児童生徒のモチベーションがさがり、アンケート項目に対して肯定する割合も下がる傾向が高かったが、今年度は１２月も６月と結果がほぼ変わらなかった。これは、教員の学力に対する意識向上により、様々な場面をとらえて取り組んだ成果であると考えられる。

（全国学力・学習状況調査のアンケートより１日の学習時間）





上のグラフは、全国学力・学習状況調査の国語 A・算数（数学）A 及び県・市の学力調査と同じ平成３０年度の小学６年生と中学３年生が学習時間に関する質問項目の経年変化を表したものである。小学校では、学年が上がるにつれて１時間以上学習する児童が増えており、全く学習しない児童は減少している。また、中学校では、１時間以上学習する生徒と全く学習しない生徒の割合は、増えているが３年生になるに従い、学習時間が増えているのがわかる。このことは、中学

に入学し、部活動等の生活の変化に始めは、ついて行けてなかった生徒達が、教員の働きかけ等で徐々に改善されているのではないかと考えられる。

４．今後の課題

小学校４年生の時の成績がその後変化しにくいことが分かってきた。小学３年生までの学びのつながりを意識して取り組むことが必要である。

学校の授業以外に全く勉強しない児童生徒の割合は、減ってはいるものの、全国と比べてまだ学習時間は少ないのが現状である。今後学校の授業以外に学習する児童生徒の割合を増やすことは課題である。

言語能力における読解力の弱さに対して取組はされてきているものの、小中学校ともに割合はそれほど高くなく今後継続していくことが必要である。

中学校区でつながった授業研究の必要性は、アンケートから教員の意識として表れてきているが、深めるまでには至っていない。特に中学校では、教員アンケートに現れているようにそれぞれの取組は高まってきているものの、まだ低い傾向にある。

今後子どもの学びの成長過程を就学前から小学２年生、小学３・４年生、小学５年生～中学１年生、中学２・３年生の４段階にと分けて考え、それぞれの時期にあった教え方、学び方の取組を考えていきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	奈良県	番号	２９

推進地区名	御所市

○　推進地区として実施した取組内容

１．研究課題

（１）学力面について

平成 29 年度の全国学力・学習状況調査における本市の学力について、小・中学校ともに全ての問題において全国平均を下回っており、中学校では国語Ｂ　・数学Ａにおいて県の平均正答率との較差が縮まったものの、小学校では全ての調査で較差が広がっている。また、小学校算数Ｂ問題では、正答率 35 パーセント以下が全体の 48.9%、中学校数学Ｂ問題では、正答率 35 パーセント以下が全体の 51.3%を占めている。また、小学校算数Ａ問題の平均正答率において、昨年度より学校間の格差は縮まったが、最大で 25 ポイントの開きがある。これらのことから、本市の学力面において、以下の３点の課題が見られる。

①　全国及び県平均正答率との格差

②　低学力傾向の児童生徒割合が多い

③　学校間格差が大きい

（２）学習面について

平成 29 年度の全国学力・学習状況調査において、小・中学校ともに、国語、算数、数学ともに好きである割合は、県平均を下回っている。また、「１日当たりどれくらいの時間勉強しますか」の質問でも県平均を下回っている。一方、児童生徒のテレビゲームや携帯、スマートフォンを使う時間の割合が高く、家庭学習や家庭での生活の過ごし方に引き続き課題が見られる。また、「自分にはよいところがあると思いますか」など自尊感情に関する質問は県平均を下回っており、引き続き課題が見られる。「今住んでいる地域の行事に参加している」の割合は昨年度と同じく小学校で県平均を下回った。また、「学校に行くのは楽しいと思いますか」「学級みんなで協力して何かをやり遂げたことがありますか」の割合は、小学校では県平均とほぼ同じであるが、中学校では県平均を下回っている。「学校のきまりを守っていますか」「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」などの規範意識に関する質問は、小・中学校ともに依然として県平均を下回っている。すなわち、本市の学習面において、以下の４点の課題が見られる。

①　学習意欲（学校の授業及び家庭学習における）が低い傾向にある

②　自尊感情が低い傾向にある

③　友だちとの関わり、地域との関わりが低い傾向にある

④　規範意識が低い傾向にある

（学力定着に課題を抱える学校数：2 校／所管する小・中学校数：11 校）

２．研究課題への取組状況

本市では、平成29年度より、「御所市　夢・誇り・学びプラン」を作成し、育みたい４つの力「学ぶ力」「切り拓く力」「関わる力」「自律する力」を明確化した。４つの力を総合的に育成し、学力の向上と低学力層の減少を目標に指標を作成することで、成果・課題の検証を行い、改善を図る。また、育みたい４つの力の向上及び学力向上を図るために市教委が総合的な事業を実施し、推進校である市内各小・中学校は、市教委の事業等を活用し、自校の状況に合わせた学力向上のステップアップ計画（３か年）を作成（Ｐ）し、実践（Ｄ）し、検証（Ｃ）し、計画改善（Ａ）を行う。

○市教委が実施する学力向上に関する総合的な事業並びに学力を下支えする事業

(1)基礎学力向上事業

児童生徒の基礎学力の向上のため、漢字検定や役の小角杯（計算力大会）への受検を補助する。

(2)中学生キャリア教育推進事業

市内の中学生（１年）が一堂に会し、講演や進路の説明会に参加することで、目標をもって努力する意識を醸成する。

(3)授業力向上サポーター事業

市内小・中学校の教員から授業力向上サポーターを委嘱し、サポーターによる公開授業や授業づくりの支援を行う。

(4)ＩＣＴ授業の推進事業

デジタル教科書やｅライブラリー、タブレットの導入を推進するとともに、ＩＣＴ機器を活用した授業を推進するための研修を行う。

(5)夢・誇り・学びプラン推進校授業づくり推進事業

推進校である市内各校が取り組む「子供の考えが深まる」授業づくりのための取組を支援する。

(6)学力向上フォーラム開催事業

推進校である市内各校の教員が一堂に会し、各校の学力向上の取組と成果と課題を共有し、市全体で学力向上に取り組む意識を高める。本年度は、推進校から２校（県の指定校を除く）と市教育委員会の研究発表、授業力向上サポーターによる実践発表を行い、それを踏まえ、青山学院大学水山特任教授から「社会に開かれた教育課程とシティズンシップ教育」をテーマに御講演をいただいた。学力向上フォーラムでの研究発表２校と授業力向上サポーターによる実践発表を紹介する。

○葛小中学校…9年間を見通した葛小中カリキュラムを編成し、指導方法・家庭学習・授業スタイルの統一などを行っている。特に、課題（めあて）の提示・課題解決・まとめ・振り返りという基本的な授業の型を統一し、伝え合い・深め合う場面を授業の中に設定している。児童対象のアンケートで、およそ9割の児童がペア学習を楽しいと感じており、話し合うことで考えが深まることを体験し、その過程を楽しむことができているという結果がでている。また、研究週間の設定を行い、互いに授業を観察できる環境をつくった。小学校の教員が中学校の授業参観をすることで、小学校段階の指導の大切さがわかったという意見も出てきている。

○大正中学校…年度当初に、学力分析委員会を立ち上げ、子供たちの学力の分析を行い、課題を明確にした。その課題を教職員だけでなく、家庭や地域とも共有し、解決に向けた対策を共に考えた。学力下位層に課題があると考えていたが、今回の分析で学力上位・中位層も伸びていないという課題が明確になり、全ての子供たちが伸びていく

ように「授業」を大切にしていく方向を打ち出した。教員の授業改善に向けて「みんなの授業研」を年間６回実施し、PTA や地域の方にも校内授業研を公開し、研究協議にも参加してもらっている。また、学校・家庭・地域が学力の現状や課題を共有し、子供たちの「学び力」を高める目的で大正「学び力」育成委員会を学期に２～３回開催している。その中で、学校からの発信だけでなく、PTA からもスマホの使い方に関する標語の発信なども行っている。

〇大正小学校　中西省五教諭

（奈良県ＩＣＴ活用教育エバンジェリスト・御所市授業力向上サポーター）

小学校プログラミング教育で育む資質・能力について、各教科等で育む資質・能力と同様に「三つの柱」（「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」）に沿って整理し、発達段階に即して育成するとしている。その中でも、「プログラミング的思考」の育成が大切になる。国語科や総合的な学習の時間の中で「プログラミング的思考」を育成する実践を行った。ロボットやビジュアルプログラミングを活用することは悪いことではないが、「ツール・手段」であって「目的」ではない。教科の中でいかに「プログラミング的思考」を育成していくのかが今後の課題である。

(7)優れた授業実践発信事業

推進校である市内各校の教員の優れた授業実践を収集し、その成果を市内各校の教員に広く発信する。今年度より、市内の教員が共有するネットワークグループを活用して、実践研究の研究紀要や研究授業の授業案などを共有している。

(8)夢・誇り・学びプラン推進担当者会議開催事業

推進校である市内各校の夢・誇り・学びプラン推進担当教員が定期的に集まり、情報交換や研修を行う。第２回の会議では、各校及び市教育委員会が行った全国及び県学力・学習状況調査等の結果分析を交流するとともに、今後の取組について話し合った。３学期には、先進地視察を行い、次年度に向けての方向性を検討する予定である。

(9)家庭学習の定着促進事業

「御所市家庭教育の手引き」を作成し、市内小・中学校の保護者に配布し、家庭での学習の協力を促す。

(10)放課後子供教室・地域未来塾事業

学校・地域パートナーシップ事業を活用し、市内小・中学校において、大学生や地域の方と協働して学習支援等を行う。

(11)その他

スクールカウンセラー派遣事業・スクールソーシャルワーカー派遣事業・特別支援教育支援員

派遣事業・日本語指導支援員派遣事業・学校司書派遣事業・適応指導教室開設事業・宝物ファイル（ＴＰＦ）推進事業・特別支援教育ｃｏ連絡会開催事業等を行う。

３．実践研究の成果の把握・検証

⑴全国学力・学習状況調査等の結果から

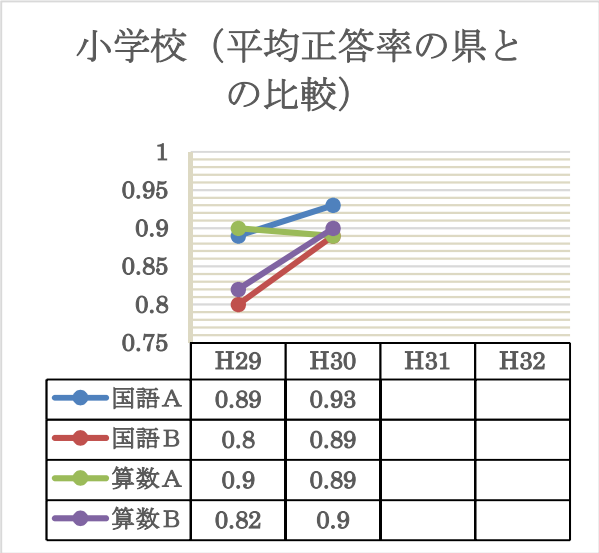
全国学力・学習状況調査では、市全体では、小・中学校ともに全てのテストで県平均を下回ったが、小学校で県平均を１とした時の本市の正答率を換算した数値は、算数Ａを除いて平成 29 年度より（0.04～0.09）縮まった。また、正答率 40％以下の児童・生徒の割合も、小学校では算数Ａを除いて減少傾向（0.15～0.38）にある。

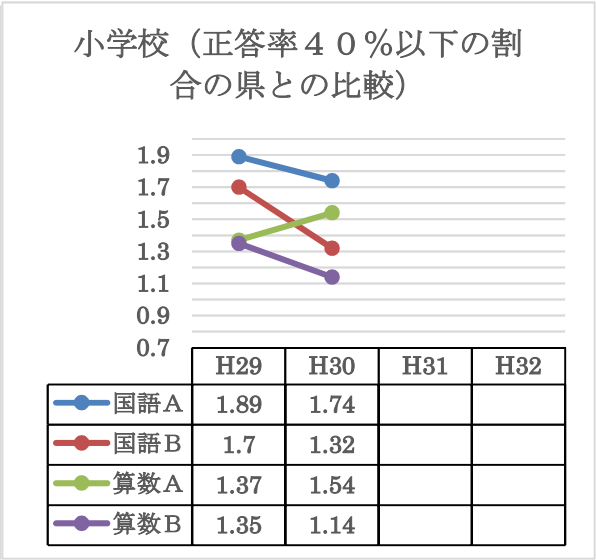
平成 28 年度の県学力・学習状況調査と平成 30 年度の全国・学力学習状況調査を比較すると、2 年間で学力の伸び（1.4～8.3 ポイント）が見られる学校が小学校で 3 校、中学校で 2 校見られる。特に今回協力校として研究を行っている御所小学校・御所中学校の 2 校は、全てのテストにおいて学力の伸びが見られる。

また、全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙の質問項目とリンクさせた児童生徒に育みたい四つの力の指標の推移をみると、小中学校ともに伸びが見られる。児童・生徒質問紙の結果から、基本的生活習慣・自尊感情・規範意識などで改善傾向が見られる。自尊感情では、宝物ファイルの取組を行っている小・中学校を中心に、全国学力・学習状況調査の自尊感情に関する項目で県平均や全国平均を上回る学校が出てきている。

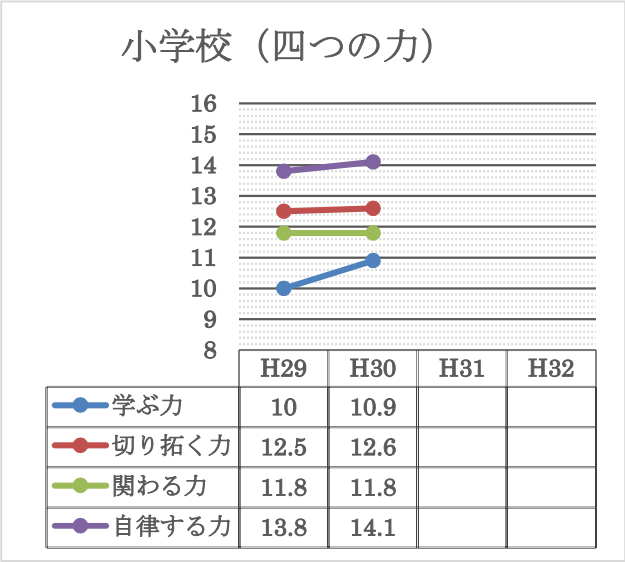
児童生徒に育みたい四つの力の指標

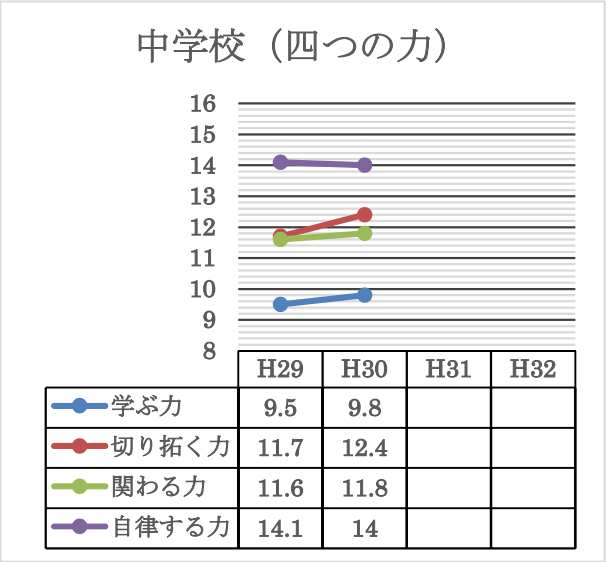
児童生徒に育みたい四つの力		H29	H30	質問項目
学ぶ力	意欲的に学び続ける力	61		国語の勉強は好きですか
		71	27	算数（数学）の勉強は好きですか
		21	10	家で、自分で計画を立てて勉強していますか
		24	12	家で、学校の授業の復習をしていますか
切り拓く力	目標をもち、未来に向かって努力する力	6	1	自分にはよいところがあると思いますか
		9	3	将来の夢や目標をもっていますか
		4		ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがありますか
		5		難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか
関わる力	他者や社会に積極的に関わり、つながる力	41		人が困っているときは、進んで助けますか。
		31		学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことはありますか
		34	20	今住んでいる地域の行事に参加していますか
		36	23	地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか
自律する力	規範意識をもち、自分をコントロールする力	1	7	朝食を毎日食べていますか
		3	9	毎日、同じくらいの時刻に起きていますか
		39	4	学校のきまりを守っていますか
		42	5	いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか





（全国学力・学習状況調査より）





四つの力（全国学力・学習状況調査より）

(2)学力向上に向けての各校の教員の意識の向上

本事業により、各校が学力向上に係る課題を克服するための実践研究を行うことにより、全国学力・学習状況調査の分析結果の共有や授業改善への意識化はなされており、研究授業や学力向上に向けた研修が行われている。また、学力向上フォーラムを実施する中で、研究発表や実践発表の内容が良かったと回答している教員の割合が 94%、85%と高い割合を示しており、各校の教員の学力向上に向けた取組の参考となっている。

４．今後の課題

本事業による各校及び市教育委員会の取組は５年目を終える。昨年度より実施している推進担当者会議の中で各校の取組を交流しているが、その中で、各校ともに朝学習や補充学習等の充実により、基礎学力面では一定の成果が見られる。一方で、全国学力・学習状況調査の学校質問紙を見ると、習得・活用及び探求の学習過程の工夫や各教科等で身に付けたことを様々な課題の解決に生かしているかについては、県平均を下回り、課題が見られる。次年度に向けて、推進担当者会議をはじめとした御所市　夢・誇り・学びプランの各事業を通して、とりわけ深い学びの実現に向けた授業改善のための支援を市教育委員会として行っていきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	奈良県	番号	２９

推進地区名	平群町

○　推進地区として実施した取組内容

１．研究課題

本年度は、本町での実践研究の初年度として昨年までの取り組みを振り返り精査するとともに、改めて

① 基礎・基本の定着を目指した授業の組み立て
② 学習意欲・学習規律の向上をはかるための授業の工夫
③ 各学校間の取り組みの標準化と学校独自の取組内容の深化
④ 主体的な学習を推進するため、家庭学習の推進を図る工夫

の４点について実践を行うとともに、成績の比較的低位に存在する児童・生徒について、個に戻って課題や問題点を再検証することを研究地域の全校で実施することとした。

２．研究課題への取組状況

○平群小学校においては学力向上に関わる校内組織を立ち上げた。

⑴確かな学力の育成（学力育成部）

まず学力とは何かを考えるにあたり、各学年でどこを特にがんばらせるのか、について話し合い、昨年度まで力を入れて取り組んできた「話す・聞く」のスピーチと、朝学習で取り組んでいる四則計算について系統性をもたせた。

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
スピーチ	２文～３文	３文～４文	書いたものを元に15秒	５文程度	メモを使って７文程度	メモを見ないで１分
四則計算	たし算 ひき算	九九 くり上がり くりさがり のあるたし算、ひき算	あまりのあるわり算 ３位数×２位数の筆算	わり算 ２・３位数÷１、２位数	小数のわり算 同分母の分数の計算	小数、分数、整数の四則計算

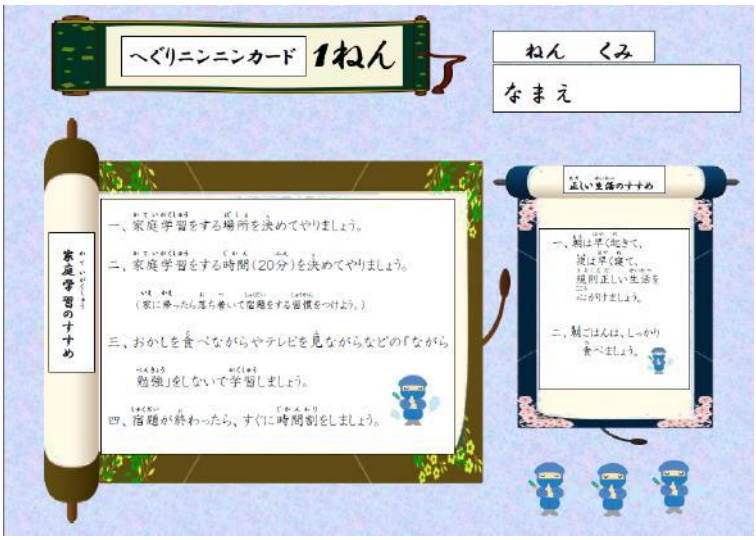
また、基礎的・基本的な学習内容の定着から始めることが必要と考え、「読み」「書き」「計算」「作文」を重点課題とした。

実際に指導するにあたり、全体への指導はどうしているのか、学習内容の定着にしんどい子に対してどんな手立てをしているのか職員で交流したいという声が上がり、実践交流会を開くことにつながった。先生方が学級づくりや授業をする上で大切にしていること、重点課題についての指導方法や実践などの交流は有意義な時間となり、ヒントを得ることができた。

さらに、朝の学習の時間に先生による読み聞かせをした。自分のクラス以外のクラスに読み聞かせに行くというもので、こどもたちは、担任ではない先生の声に耳を傾けていた。

（２） 家庭学習の充実（家庭学習部）

これまで本校では学年毎に応じてつくった「家庭学習の手引き」を家庭訪問時に配布し、家庭学習の重要性について保護者に説明してきていた。しかし、そのときだけの取組みに陥りがちで継続性に欠ける面が見られた。そこで、昨年度から家庭学習チェックを行ったり宿題の提出チェックを行ったりしてきた。今年度は、従来の手引きは文字が多く、活用しづらいとの意見が出たことから内容を刷新し、本当に伝えたいことにしぼって簡略化したものに作り替えた。今年度は試行的に使用しており、その結果を踏まえて次年度すべての学年で作成、配布する予定である。



へぐりニンニンカード

（３）学習規律の確立（学習規律部）

生徒指導上の課題から、教室に入りにくかったり学習上のルールが守れなかったりする児童が目立った。そこで、まず大事にする学習規律として、

・チャイム着席・授業始めの挨拶・返事・学習用具の準備

・上手な聞き方

を大切にしていこうと確認した。

また、「低い規範意識」「自尊感情の低さ」も大きな課題であった。児童の規範意識を高めるには、自分たちでどうすればよいか考えることが大切ではないかと考え、毎月の生活のめあてを学級単位で具体化し、全校集会でその振り返りを発表することにした。

元気のなる木

さらに自尊感情を高める取組みとしてお互いのよいところを認め合い、励まし合う言葉を増やそうとして「元気のなる木」に取り組んだ。これは、言われてうれしかった言葉、励ますときにかけてあげたい言葉を紙に書き、貼っていくものである。児童のなかには、書かれている言葉を使ってコミュニケーションを図る姿がみられるようになった。

（４）教員の指導力を高める取組み（職員研修部）

本年度、若手教員育成研修の拠点校となったこともあり、２、３年目の若手教員が時間を惜しんで教材研究をしている姿が日常的に見られた。その姿に触発されたのか、昨年度と比較して多くの研究授業が公開された。普段から授業に関わって教員同士が話し合う姿が今まで以上に見られるようにもなった。

また、「ベテランの先生方の授業の見方、指導へのこだわりを聞いてみたい」「お互いの授業を見せ合って参考にしたい」という教員の声が自然発生的に生まれ誕生したのが、参観ウィークと平群塾である。

・参観ウィーク

決められた期間は時間の空いたときにどの授業を見に行ってもよい。ただし、参観したら何らか感想や意見をカードに書いて授業者に渡す。というルールだけを決め、２学期以降に始めている。刺激しあうことが授業改善につながっているのではないかと考えられる。

・平群塾

毎回一人の教員が自分のこれまでの指導上のこだわり（大切にしてきたこと）や自慢できる実践を発表し、参加者が意見を交換するという取組みである。

なかなか時間がとれずにいるが、こうした機会を開きたいという声が教員の中から上がったことは今までなかったことであるという報告を受けている。

〇平群中学校においては、『元気で活気に満ちあふれた学校づくり』をテーマに、「生徒の学ぶ意欲を高めるために」「楽しい学校づくり（学校の活性化）のために」について取り組んだ。

（１） 生徒の学ぶ意欲を高めるために

①「学ぶ楽しさ」や「わかる（発見できる）喜び」など、「主体的な学び」の推進に努め、研鑽する。

◆「安心して学べる環境」「間違ってしまった回答・発言等をあたたかく受け入れられる環境」「授業中に心地よい声が飛びかう環境」つくりに努め研鑽した。

◆生徒の話し合いや男女の協力等を育みやすい環境を設定することで、生徒が自然に話せ、相談できる環境ができ、自分の意見・考えを、他人に伝え・聞く習慣ができてきた。

②ＩＣＴ機器を使った授業づくりを研究する。

◆デジタルカメラの利用やデジタル教科書を活用すること等、ＩＣＴ教育の推進の基盤をつくるように努めた。

③生徒が自らの能力を発揮する場面や手法を取り入れる。

◆生徒相互での話し合い活動や生徒相互で教え合う活動を習慣化させるような授業を展開した。

④互いの授業を参観しあう取組

◆生徒にとって、わかる喜びや学ぶ意欲が高まるような授業展開ができるように研鑽した。

◆互いの授業を参観し合うなどして、教師としての「話術」を高められるように努めた。

（２） 楽しい学校づくり（学校の活性化）のために

①生徒会活動（本部役員、各委員会活動）の活性化

◆生徒会活動等、授業だけでなく行事などあらゆる場面で、生徒自身が活躍する場面や存在感を示す機会を随所に設けることで、自発的な取組や生徒が主体となった活動が増えてきた。

◆「どんな学校にしたいか」を常に問い掛けながら、授業や行事に取り組んだ効果として、生徒たちの心に「自分たちが学校を創っていく、機能させていく。ということは、自分たちでやって行かなければならない。やっていける。そして、みんなで支えていこう。」という意識が現れてきた。この意識の現れは、規範意識の着実な芽生えになり、学校の秩序の維持になってきた。

②ぬくもりのある学校環境づくり

◆学校内の掲示物を増やし温かな環境づくりに努めることで、生徒を大事にする心を伝えることができてきた。

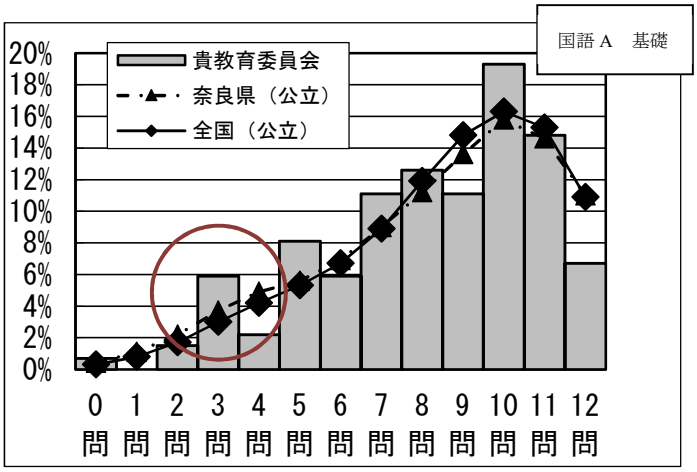
このような具体的な実践によって、その成果が表れてきていることも多く見られた。

しかしながら、平成 30 年度の全国学力・学習状況調査の教科学力の「国語Ａ：主として知識」の結果で正答数が低かった生徒に注目したとき、「重点的に指導すべきと考えられる問題」として、漢字を書く・内容を読み取る・考えを述べる・漢字が読めない、の項目があげられた。そのことからも分かるように、「読む → 書く → 理解する → 考える → 説明する」といった、それぞれの『力』や『流れ』が乏しいことが伺えた。

また、その生徒たちの生徒質問紙調査を見てみると、家庭学習の活動や習慣の未定着さが見られ、家庭学習の習慣を定着させる活動が不可欠であることが分かる。加えて、じっくりと粘り強く学習する習慣や学習したことを活用する習慣が身についていないことも分かった。さらには、自尊感情、自己肯定感や自己有用感が低く、地域への愛着や感謝の心も薄いことが分かったと報告を受けている。

３．実践研究の成果の把握・検証

・本年 12 月に実施した「学力・学習状況調査結果分析報告会」において、中心課題として学力の比較的低位（特徴的な例として小学校国語Ａ問題について右図の〇内に示す）の児童・生徒について、低学年にさかのぼり、家庭での学習状況や学級での指導について検証を行った。その結果、家庭での学習環境に課題のある児童が多いことや、各学年において学力の向上や定着について様々に取組はしてきているが、担任が替わると次の学年にその児童の学習課題や、取り組んできた内容について、上手く引き継ぎができていないなどの問題点が浮き彫りになってきた。学習課題や取組内容をスムーズに引き継ぎ、滑らかな学力向上を図るための工夫が必要である。そして、学習内容の深化について学校で行えることには時間的な限界があり、家庭での有効な学習時間を向上させる取組が必要なことが明らかになってきた。



小学校　国語 A 問題

　そこで、児童の学習課題や取組に内容についてきちんと引き継げるような、個人学習カルテのようなものを作成する必要のあること、家庭での学習の習慣づけのため、「家庭学習の手引き」を作成し配布すること。などとともに、家庭での学習の見直として、全員に一律に与えている宿題等についても、個人に応じたものにする必要性が認識されてきた。

４．今後の課題

・個人学習カルテのようなものを、先進研究地区の例を参考にするなど、実用的なもので教員に新たな負担をできるだけかけないものを作成し、活用方法の研究を進めることで児童の学力向上を目指したい。また、家庭での学習の見直しとして、全員に一律に与えている宿題等についても、より個人に応じたものにできないか、引き続きの研究課題としたい。

・あわせて、低学力の児童については低学年の時からの基礎学力の定着に課題があることが明白になったので、その結果を受けて基礎基本の定着を確認するため、算数の九九や学年漢字の読みなど基礎基本の学力が定着されているかを調査する。そして、低学年の児童を中心にボランティア等の協力を仰ぎ、基礎基本の反復練習による基礎学力の定着を十分に行いたい。定着が図れない、スムーズにいかない児童についてはその問題が、機能的な問題なのか気質的な問題なのか、それとも環境要因によるものかを明らかにし、個に対応した指導を確立したい。

・また、次年度はもう一歩頑張り切れていない、成績の比較的上位層に位置する児童・生徒の問題点や課題等にも、個に戻って焦点を当てて研究を進めたい。

・次年度も学力・学習情報調査の研究報告会を実施し、成果を共有するとともに学習状況調査の学習意欲や、学習への取組実績を通して本実践研究の成果検証としたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

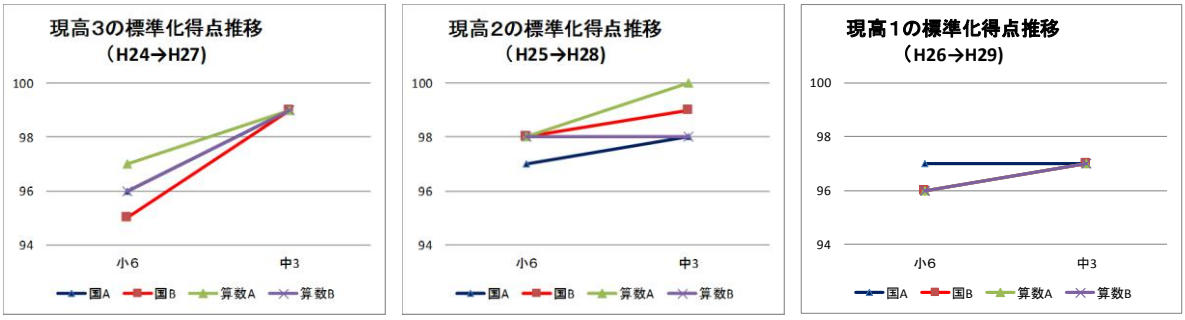
平成３０年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	奈良県	番号	２９

推進地区名	宇陀市

○　推進地区として実施した取組内容

１　研究課題



（全国学力・学習状況調査による。全国平均を１００とする。）

全国学力・学習状況調査などの指標では、同一集団を年ごとに追うと、小学校段階では全国をやや下まわるものの中学卒業にかけて全国平均に迫ってきている。しかし過去数年の状況をから、市全体を通して例年以下のような共通の課題が認められる。

国語・算数・数学　調査問題の考察から

①　基礎・基本の定着に課題がある。

②　目的や意図に応じて複数の「記述」「グラフ」「表」などから適切に情報を選択する力に課題がある。

③　②に付随して、根拠を明確にして自分の考えを表現することに課題がある。

④　条件作文等書く力に課題がある。

児童生徒質問紙調査の考察から

①　算数・数学の愛好度が低い。

②　家庭学習で宿題はしているが、それ以外の学習を自主的に取り組んでいる児童生徒の割合が低い。

③　「自分にはよいところがある」（自尊感情）が低い。

昨年度まで２年間、①教師の指導力の向上、②家庭学習の充実を柱に取り組んできた。①については、誰もがわかりやすい授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）や主体的・対話的で

深い学びの授業づくり（ＡＬ化）、②ついては各学校の家庭学習の手引き作成を通して児童生徒への意識づけを図ってきた。その結果として、平成２９年４月～平成３０年４月に行った宇陀市生活行動・学習活動調査において小学校で、学年・学校によるばらつきはあるものの、授業のスタイル４項目（「発表の機会」「話し合い」「目標の提示」「ふり返り」）において肯定的な回答が４月の調査を若干上回る結果となった。一方、中学１年の４月と 12 月の調査において、上記授業のスタイル４項目における顕著な低下が見られ、小学校と中学校のギャップも課題であり小中の連携性の向上は今後の課題として横たわっている。また、「家庭学習時間」、「計画的に学習」の項目についても課題は残っている。２年間の取組により一定の成果は見られたものの今後、定着に向けた継続的な取組は必要である。

そこで本年度は、過去２年間の取組の定着のための仕組み作り目指した。中でも宇陀市内すべての学校において、授業等で最低限徹底すべきポイントを「UDA スタンダード」として整理し、その定着を通して主体的・対話的で深い学びを推進するとともに、例年課題となっている家庭学習の習慣化の具体的な取組を継続したい。当たり前のことを徹底して実践する雰囲気を市内全体に広げていきたいと考えた。

２　研究課題への取組状況

（１）協力校の取組状況

①　授業のユニバーサルデザイン化を中心としたわかる授業づくり

・実物投影機、デジタル教科書等 ICT を活用し日常的に視覚支援を行った。
・板書の量、チョークの色など必要な環境調整を行った。
・端的で具体的な指示など教師が指示、説明のしかたを意識した。
・学習の流れ、見通しが分かりやすい工夫をした。
・中学校において、教科によって別々に出される提出物や宿題等の情報掲示の一元化を行った。

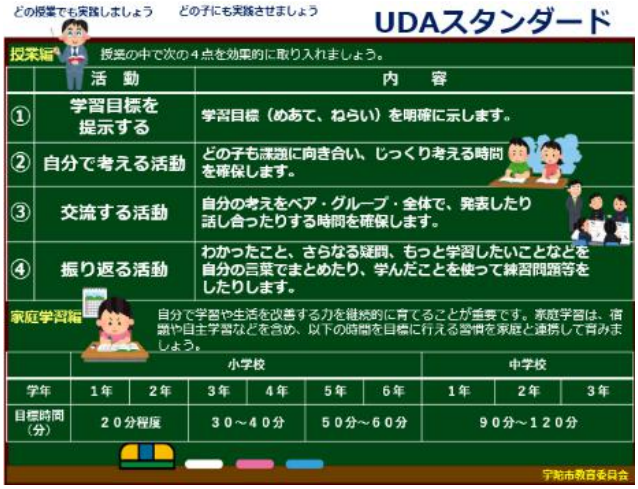
②　主体的・対話的な学習への取組

・特に話合いの部分で、ワークシートや交流の仕方の工夫によって伝え会う活動が充実したものになるような工夫が行われた。
・話合いの観点の明確化。
・考えの交流を行いやすい学習形態の工夫。
・学び合いの目的、ルールを明確にした。

③　家庭学習（自主学習への取組）

・家庭学習（自主学習）の手引きを作成し、家庭への啓発を図った。
・学校独自アンケート等を用いて実態を把握し効果を測定した。
・自主学習の良い例を取り上げ、紹介を行った。
・スタンプ、コメントなど継続的な取組への意欲づけを行った。
・小中が連携し、自主学習への取組の情報交換を行った。

（２）推進地区の取組状況



・過去２年間の取組の定着のための仕組み作り目指した。中でも最低限徹底すべきポイントを UDA スタンダードとして整理し、その定着を目指した。UDA スタンダードとしてまとめるために「UDA スタンダード推進委員会」を開き、UDA スタンダードの内容について各学校の意見交流を行った。また、学力調査分析に基づいた学力向上の取組、家庭学習の充実に向けた取組の意見交流を行った。また、UDA スタンダード推進委員会で出た意見を踏まえ、校長会でも意見を募り、UDA スタンダードを決定した。

・決定した UDA スタンダードをカラー両面印刷し、全職員に配付するとともに、市教委ホームページにも掲載し広報しつつ、周知、徹底を進めている。

・宇陀市生活行動・学習活動調査（学習生活アンケート、対象小３～中３、４月と１月に実施）の活用を図った。２０の調査項目から、学校が１項目を選び数値目標を設定し取り組むプラニングシートを作成し学校改善の一助とした。

・２学期以降に「宇陀市学校ステップアップ訪問」として全小中学校の学校訪問を行い、学校改善のための支援・助言を行った。主な支援・助言の内容として、①宇陀市生活行動・学習活動調査項目からの目標への取組状況、②学校改善の状況、②全国学力学習状況調査の分析からの今後の取組、③UDA スタンダードの取組状況についてである。

・学力調査の結果から、宇陀市全体の傾向として、条件作文等書く力に課題がある。そこで、協力校の菟田野小学校と共催で、奈良教育大学教職大学院の東畠准教授をむかえて、各小学校から複数名の参加を得て研修会を行った。ここでは実際の問題や詳細な分析結果から、子どもにどのような力が不足しており、そのために何をすべきか具体的に解説をいただいた。

・２月に第２回目の UDA スタンダード推進委員会を実施した。ここでは市内全学校の管理職、主任級教諭参加のもと、宇陀市の協力校３校からの実践発表及び、３校代表者を交えてのパネルディスカッションでテーマを深く掘り下げつつ、成果発表の機会とした。UDA スタンダードの内容を中心に、特に宇陀市の課題である、授業づくり、家庭学習、読書習慣、小中連携等をテーマとし行った。

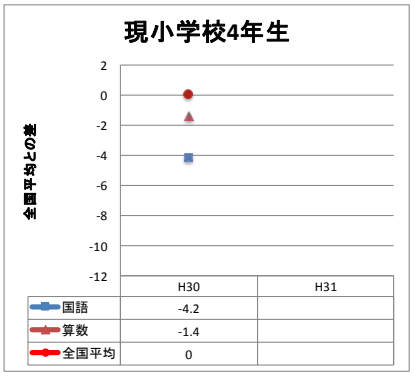
・本年度は、小学校放課後学習支援事業のモデル校を３校募り、週２回程度、補充学習の必要な児童に対して学習支援員による個別の指導を行ってきた。学校、児童、保護者からも概ね好評である。特に児童にとっては放課後残って学習するのを嫌がるというよりは、わかって帰ることがで

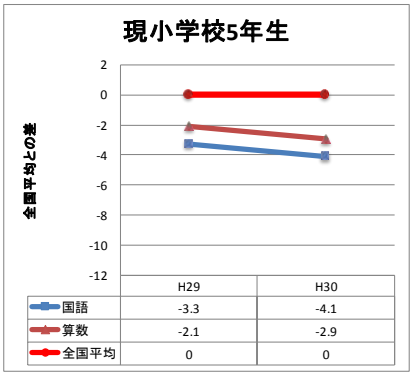
きる喜びの方が大きいため、積極的に参加している。来年度はこれを全小学校へと広げていきたい。

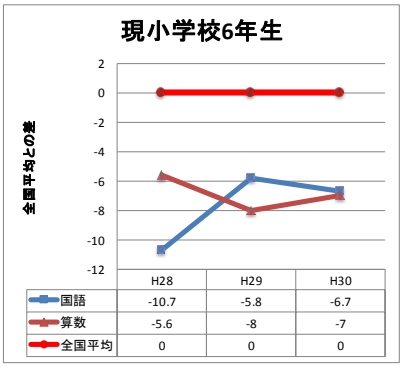
・宇陀市初任者フォローアップ研修を実施した。初任から２・３年目の教諭に対して、この期間に１回指導主事が授業参観をして、面接、指導助言を行う研修である。学校ではこれを良い機会と捉え、しっかりと準備をし、高い意識で研修に臨む若手教員の姿があった。話合い活動を実際にどのように授業に取り入れればよいか率直な質問が聞かれた。

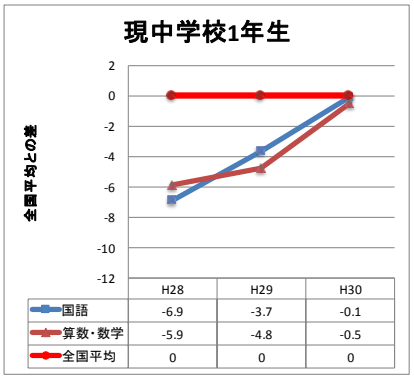
３　実践研究の成果の把握・検証

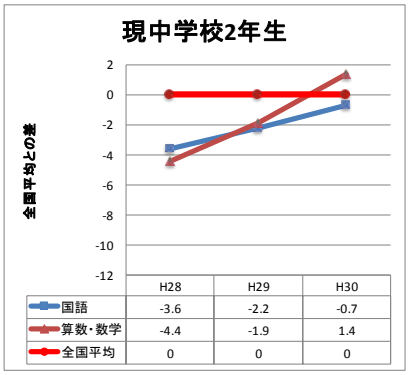
・平成 30 年度各学力調査（４月実施）の結果　※同一集団の全国平均との差

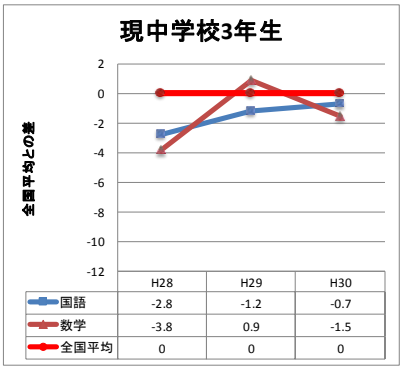








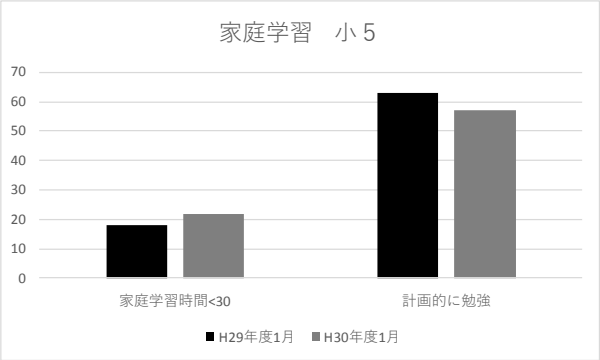


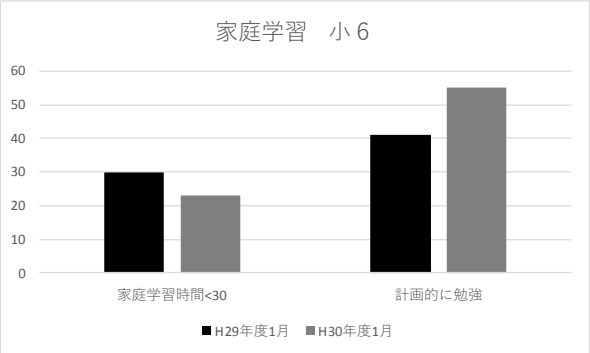


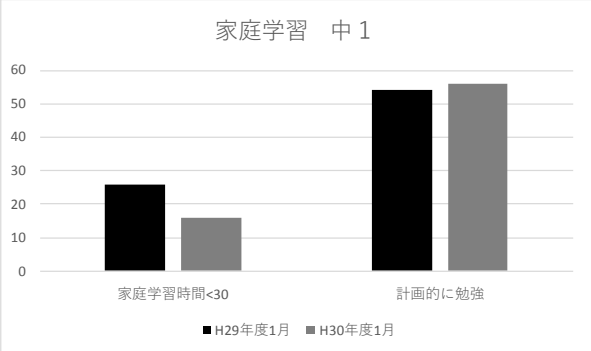
・平成 30 年４月の結果であるため、今年度の取組が反映されているわけではないが、全体として小学校段階で見られた全国との差が中学校段階で縮まるあるいは越えて来ている状況は宇陀市の特徴として変わらない。現中１が徐々に全国平均に迫ってきているのは小学校での取組の成果と言えよう。小学校段階では子どもに寄り添い、学ぶ意欲をスポイルすることなくじっくりと取り組んで来たことが、高学年から中学校段階での伸びを見せているのかも知れない。

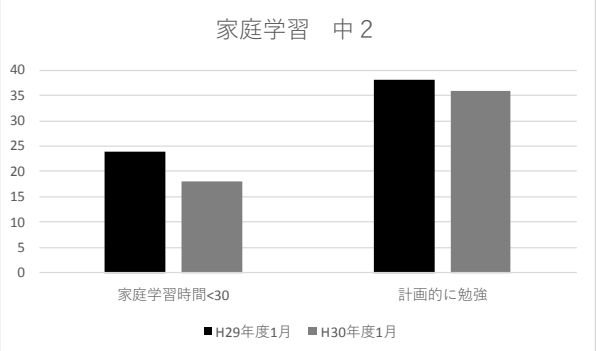
・宇陀市生活行動・学習活動調査の結果

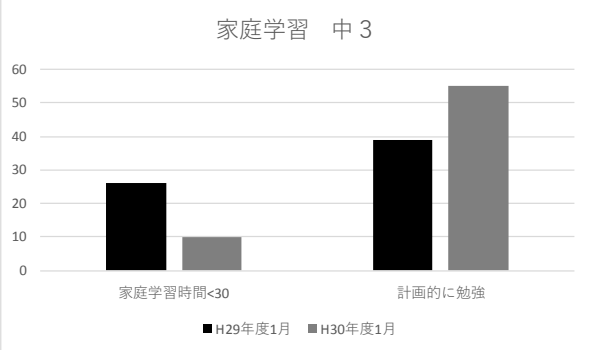
〈家庭学習習慣の定着〉前年度同時期の同一集団と比較。「家庭学習時間が３０分未満」と答えた割合及び、「家庭で計画的に計画的に勉強している」に肯定的に答えた割合





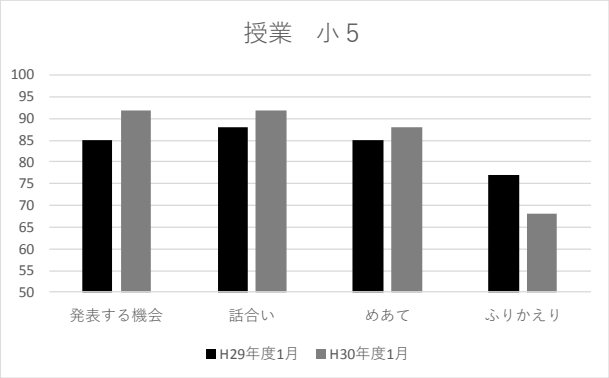


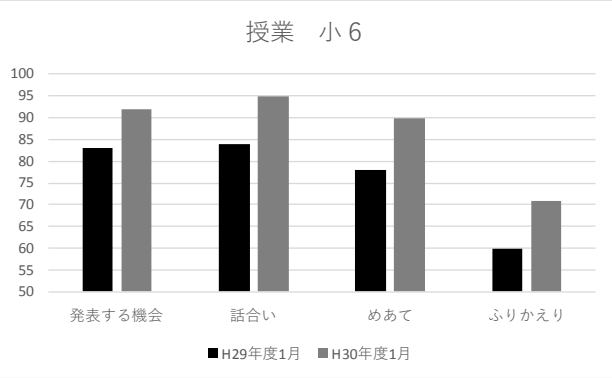


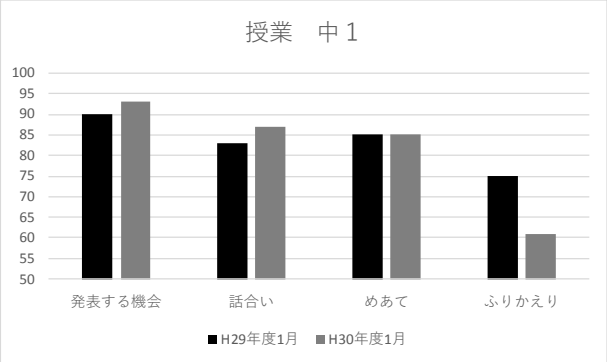


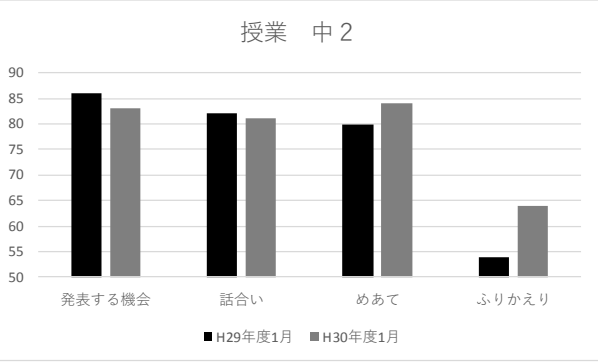
家庭学習時間が３０分未満と答えた割合は、昨年度同時期と比べると小学校５年生以外で減っており、４月調査と比較しても小学校６年生を除いて減っている。つまり、家庭での学習時間は増加傾向を示している。「家で学校の宿題をする」の項目は、ほぼ９５％の児童生徒が肯定的に回答している。家庭学習時間の増加傾向が認められることから、家庭での学習習慣の定着に向け一歩動き出したと捉えている。「自分で計画を立てて勉強をしている」の項目に対する肯定的な回答は、学年によりばらつきがあり、奈良県平均も下回る状況である。学習習慣の定着と共に、何をいつ学習するかを自分で決めて取り組める手立てを講じることが課題と捉えている。

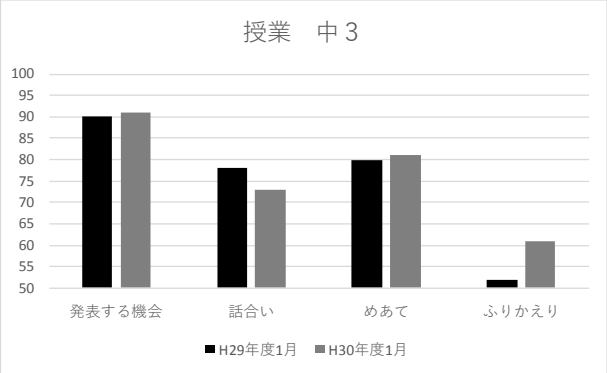
〈授業４項目〉前年度同時期の同一集団と比較。授業について「自分の考えを発表する機会があたえられていた」「話合う活動をよく行った」「目標が示されていた」「ふり返る活動をよく行った」に肯定的に答えた割合

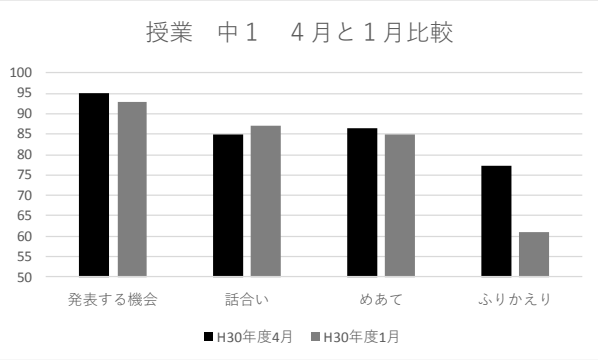












小学校において「自分の考えを発表する機会が与えられていた」「話し合う活動をよく行った」「目標（めあて）が示された」の項目で肯定的な回答の割合がほぼ９０％に達しており、４月調査と比較しても増加傾向である。またこの３項目は中学校１年生、２年生でも８０％を超えてきている。「授業をふり返る活動をよく行った」の項目に関しては、上記３項目より少し低く、本年度１月調査では小学校７０％程度、中学校６０％程度であった。しかし、集団は違うが、昨年度１月調査の同項目では小学校では６０％程度、中学校５０％程度であった。これらのことから、授業４調査項目については、一定の改善傾向があると捉えている。

授業に関わる調査項目では、昨年度の中学１年生は、小学校を卒業したばかりの４月調査から中学校生活を経験した１２月調査にかけて顕著な低下が見られた。しかし、今年度の中学１

年生は「振り返り」以外の項目に大きな低下は無かった。このことから、中一ギャップへの対応として、授業における小中連携性の向上というある程度の成果があったと捉えている。

〈榛原小学校〉

・個の考えをしっかりと持たせつつ、ペア学習やグループ学習での自分の考えの深化や、伝達・振り返りの時間を設定してのその授業内での学習内容の理解が定着してきた。

・アンケートでの「算数の問題を解く力の現状意識」について、高学年になると「計算・図形などの問題ができる」と答えた児童が増えている。これは昨年からの「基礎基本の力の充実」に力を入れてきた成果が現れていると考える。

・自主学習で、興味を持ったことがらについてまとめた児童のノートを掲示して紹介したところ、参考にして取り組む児童が増えた。自分のやり方に自信を持ち、自主性が高まるという意味でも大変効果的であった。

・今年から保護者による図書ボランティアが創設され、今まで貸し出ししていなかった昼休みにも図書室に行って本を借りる児童が増えた。

・１２月時点で、図書室や学級文庫を利用して個人で７０冊以上読む児童や、年間学級合計１０００冊を超える学年が４学級あった。

〈菟田野小学校〉

・「書くこと」に対して苦手意識をなくし、書き慣れることを目的として、全校で１００マス作文に年間通して取り組んだ結果、「書くこと」に慣れ、全体として時間あたりの書ける量も増えてきた。また、苦手意識のある児童に対しては、モデルとなる書き出しや文末の書き方を示したり、友達が書いた作文を学級で紹介したりすることで、なかなか書けなかった児童も少しずつ書き進めるようになってきた。

・また、国語科の「書く」の授業では相手意識や目的意識を持たせるために、学習の流れを明示しモデルを紹介することで、ゴールが明確になり学習に意欲的に取り組むことができた。

・４月と１２月のアンケートの比較では「国語が好き、まあまあ好き」と答えた児童の割合は６８％から７８％と増加している。また、「書くことが好き、まあまあ好き」と答えた児童も６０％から６８％と増加している。その理由として「書き方がわかるようになったから」「書けるようになったから」「友達や先生に読んでもらえるから」などが挙げられた。

・家庭学習の充実を図るために、「家庭学習の進め方」を配布したり、保護者や児童に対してアンケートを行ったり、「家庭学習のヒント」を配布し、学年に合った学習内容を紹介した。自主学習に熱心に取り組む姿を褒めたり、工夫して自主学習しているノートを紹介したりすることで、少しずつ自主学習に取り組む児童も増えてきている。

〈菟田野中学校〉

・学校に教員全員で生徒を育てるという意識ができ、互いに連携をとりながら研究体制をとれるようになった。

・授業での規律が保たれ、しっかりと授業に参加し、学び合い活動もよくできるようになっている。逆に、学び合い活動の方が、生徒同士で進めるため、まとまりがあるときさえあり、一斉

授業ではうつむいていた生徒が、学習班になるとしっかりと参加し、話し合いながら学習を進めている姿があった。

・「学び合い」の活動がスムーズにできるようになり、わからないこともすぐにきいたり、教えたりする姿がある。

・「自主学習ノート」は、定着し、それと共に家庭での学習習慣は一定ついてきた。

・補習や学習支援の取組とも重なる成果として、自学自習の活動が自然に行えるようになって、日頃の教師への質問なども増えて来た。

・小中連携の活動を進めることができた。指導者である教員それぞれに義務教育９年間としての、教育の視野が広がり、全体で方向性を合わせ、何を大切にするかの意識が出てきた。小中共通の目指す児童生徒像を、保護者や地域に示せたことで、学校として大きな地域への発信となった。

・家庭学習時間の明確な増加が認められた。また、「学び合い」の活動を積極的に取り入れた中学校３年生では、「数学が好き」の項目に肯定的に答えた生徒の割合いが大幅に増加した。

４　今後の課題

・「当たり前のことを、徹底して実践する」UDA スタンダードの周知徹底の基礎作りの１年であった。それに伴い始めた「宇陀市学校ステップアップ訪問」での授業参観においてさえ、UDA スタンダードの内容の実施が不十分な現実を把握している。その徹底が課題である。また、授業形式だけではなく、主体的で対話的で深い学びに向けた質的な追求を忘れてはならない。

・読解力、書く力を含め、宇陀市の特徴的な課題について今後も継続的に対応が必要である。

・家庭学習（自主学習）習慣の定着については、改善に向けての第一歩を記すことができたが、協力校の３校の実践を市内に広げつつ、小中連携する中でさらなる定着を図っていきたい。また、学習時間だけに留まらず、主体性、計画性を育てる取組が重要になってくると捉えている。家庭に啓発するだけではなく、学校が子どものやる気に火をつける、粘り強い実践を目指したい。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良	番号	２９

協力校名	奈良県五條市立　野原小学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

平成 29 年度の全国学力・学習状況調査において、６年生国語・算数は、いずれも全国より 10 ポイント以上低くなっており、たいへん危惧される状況である。４・５年で行われた県や市による学力テストにおいても平均を下回り、いわば学校全体で学力向上に取り組まなければならないという危機感を抱いている。特に、自分の考えを文章に書き記すことや、文章全体を読んで要旨をつかむことなどが苦手で、そのことが算数にも自ずと影響していると考えられる。

ここ数年間は、自分の考えを自分の言葉でみんなの前で言えるように、そして、それをしっかり聞き取って、考えを深められるように、取り組んできた。テストの成績を見ても、聞く・話す分野では平均を上回っており、一定の成果を収めてきた。朝ののびのびタイム(ドリルなどを通して日々の学力を下支えする時間)や読書タイムで定着を図ってきているが、十分な成果は未だ見られない。

現状をみると、読解力の不足が成績に影響を与えていることがわかる。よって、子どもたちに確かな読解力をつけることが急務である。そこで、今年度は、読む・書く力をつける国語の授業を中心に研究を進めてきた。本校の教員の多くは 20 代であり、まだまだ授業技術は発展途上なところがある。このことをふまえ、指導をいただきながら、しっかりと授業技術を磨く努力をするとともに、主体的・対話的に国語の理解を深めることができる活動を展開したい。

２．協力校としての取組状況

本年度の最重要課題を次の３点とした。

①　根拠を明らかにしながら、文章を読み解く授業を充実させる。

②　主体的に学習に臨めるよう学習習慣を見直し、家庭学習のあり方を研究する。

③　日常的に教室に本がある環境を作り、読書活動を活性化する。

①　根拠を明らかにしながら、文章を読み解く授業を充実させる。

読解力の課題として、全国学力・学習状況調査の結果から明らかになったことの一つに、漢字や文法など言語事項が苦手なことが挙げられる。主述関係や係具合を尋ねられると正確に捉えていないことが露呈してしまうのである。言語事項の取り扱い単元で学んだときには、わかったつもりになっていても、通常読み進むときには意識できていないことがうかがわれる。そこで、辞書を引いたり、主語や修飾語や述語を意識したりする場面を読む学習の中でも意識させることが大切となる。大事な語句や文に線を引いたり、指で指し示したりする活

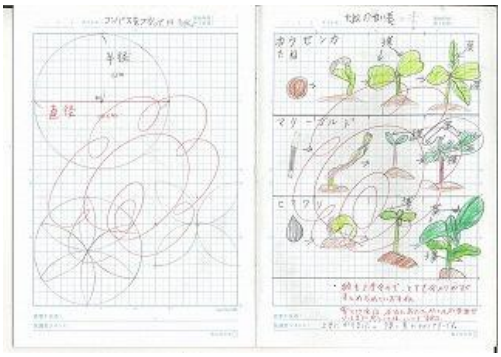
動を取り入れ、語句のつながりを意識した読みの力をつけるよう心がけた。また、新聞記事を読んだり、視写を行ったりして、初めて出会う文章を読む機会も多くもった。

授業公開を月 1 回程度行い、部会で参観し、共通した評価シートを活用しながら、互いの授業について話し合った。「読む」という活動を中心に、共通の観点をもって、互いに学び合う授業展開を工夫しようと交流を重ねた。中学校とも、９年間のカリキュラムの流れを知り、見通しをもって取り組めるよう、参観交流を行った。

また、ICT を活用し、文章や挿絵などを直接見ながら、線を引いたり話し合ったりする機会を多くもった。さらに、ノートを投影することで、話し合いの内容や意見を全員で確かめ、学習内容を共有することも行ってきた。

② 主体的に学習に臨めるよう学習習慣を見直し、家庭学習のあり方を研究する。

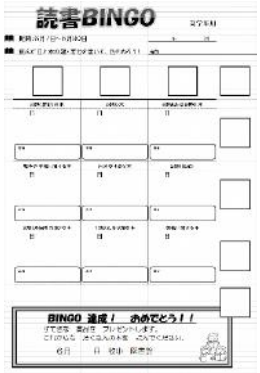
子どもたちの様子を見ていると、学習に向かう姿勢に課題があるように見受けられた。まず、時間の使い方である。チャイムが鳴ると席にもどってくるが、気持ちがそろわず、すぐにあいさつとはいかない。また、その影響もあり、授業中に振り返りをできずに終わることも多かった。そこで、チャイム着席とあいさつ、教科書やノートを出すまでの流れについて見直しを図った。



次に、聞き合い、学び合う集団づくりが十分できていないようでもあった。わからないときに「ここ、わからないから、ちょっと教えて。」とか、「どうやったら解けるの?」と周囲の友だちに尋ねることができ、尋ねられた友だちも、学んだことをうまく伝えられるように学び直すことができるような１集団に高めたいと、授業研究の視点の一つとした。

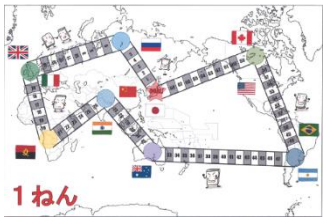
家庭学習については、従来のドリル学習を大切にしつつ、計算・漢字・音読などの日々の課題を宿題として取り組んできた。家庭における子どもたちの忙しさを考慮しつつも、自ら学ぶ習慣を身に付けるための方策を検討した。

そして、「家庭学習の手引き」を作成して各家庭に配布し、これまでも採用してきた「自学ノート」の取組をうながした。子どもたちにとって「自分に必要な」また「自分がやってみたい」学習と位置づけて、家庭で取り組ませ、達成感を認めていくようにした。



③ 日常的に教室に本がある環境を作り、読書活動を活性化する。

市の読書活動活性化事業の支援を受け、昨年に続き、図書館司書に入っていただき、読書活動の活性化に取り組んだ。昨年度、図書室の環境を刷新し、ポップづくりや、おすすめの本やさんづくりなどの活動や、ブックトークやビブリオバトルの書籍紹介などを行ってくれた。また、



市の図書館の支援を受けて、「にじ色えほん村」という絵本の広場を年に２回行ったり、講師を招聘して、絵本との出会いをどのように演出するかという研修を行ったりした。子どもたちは、本に親しみ関心も高まったが、日常的にいつも本があるというところまでは至らなかった。

そこで、本年度は、前年度の活動に加え、「出前図書」として国語の単元になるべく密着

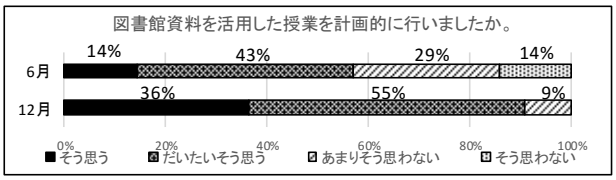
した内容の図書を司書さんに集めていただき、コンテナで学級の子どものそばに届けてもらった。朝の読書の時間やプリントなどのできた後など、身近に図書のあることで、興味をもつことができ、調べ学習などでは、すぐに必要な箇所を見つけることができるようになっている。

３．取組の成果の把握・検証

教育委員会で取り組んだ教員アンケートでは、図書資料を学習の中に位置付ける項目において６月を大きく上回り図書のある日常や学習が根付いていることがわかる。

1 図書館資料を活用した授業を計画

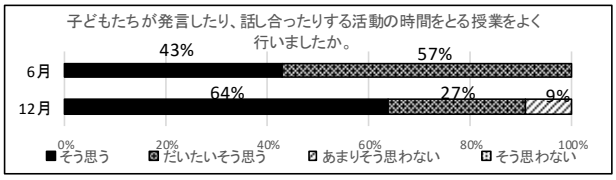
	6月		12月	
そう思う	2	14%	4	36%
だいたいそう思う	6	43%	6	55%
あまりそう思わない	4	29%	1	9%
そう思わない	2	14%	0	0%
合計	14	100%	11	100%



また、授業の初めにめあてをきちんと定着させてから学習を始めたり、子どものつまづきを予想しながら手立てを準備したりといったことが着実に意識されてきている。子どもが自分で考え、取り組めるような課題作りにも進んで配慮し、学級内のルール作りもある程度成功している様子がうかがわれる。文章を読み解くことが大切だと意識し、その共通意識をもって研究授業や授業参観に臨んでいることがわかる。

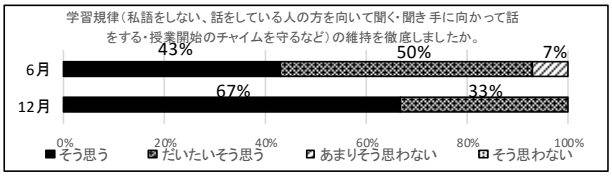
5 子どもたちが発言したり、話し合っ

	6月		12月	
そう思う	6	43%	7	64%
だいたいそう思う	8	57%	3	27%
あまりそう思わない	0	0%	1	9%
そう思わない	0	0%	0	0%
合計	14	100%	11	100%



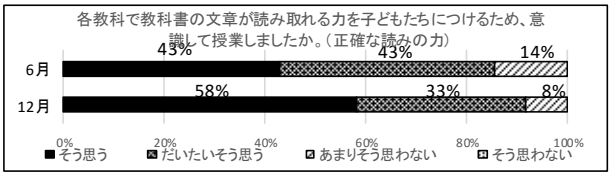
8 学習規律（私語をしない、話をして

	6月		12月	
そう思う	6	43%	8	67%
だいたいそう思う	7	50%	4	33%
あまりそう思わない	1	7%	0	0%
そう思わない	0	0%	0	0%
合計	14	100%	12	100%



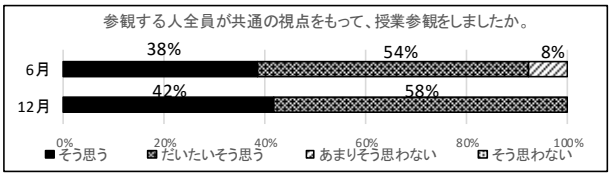
10 各教科で教科書の文章が読み取

	6月		12月	
そう思う	6	43%	7	58%
だいたいそう思う	6	43%	4	33%
あまりそう思わない	2	14%	1	8%
そう思わない	0	0%	0	0%
合計	14	100%	12	100%



13 参観する人全員が共通の視点をも

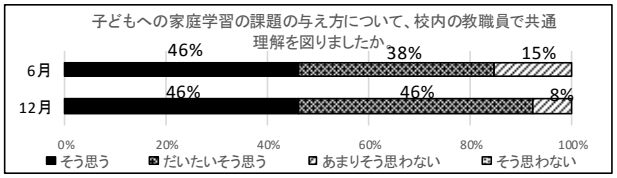
	6月		12月	
そう思う	5	38%	5	42%
だいたいそう思う	7	54%	7	58%
あまりそう思わない	1	8%	0	0%
そう思わない	0	0%	0	0%
合計	13	100%	12	100%



家庭学習については、課題の出し方を工夫し、効果的な取組を具体的に示し、実際の子どもたちの努力について、コメントを入れたり、周りの子どもたちに紹介したりしながら励まし、よりよいものにしようと取り組めた。

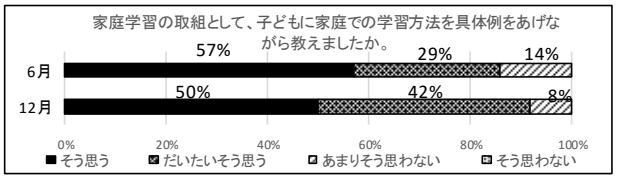
15 子どもへの家庭学習の課題の与え

	6月		12月	
そう思う	6	46%	6	46%
だいたいそう思う	5	38%	6	46%
あまりそう思わない	2	15%	1	8%
そう思わない	0	0%	0	0%
合計	13	100%	13	100%



16 家庭学習の取組として、子どもに家庭での学習方法を具体例をあげながら教えましたか。

	6月		12月	
そう思う	8	57%	6	50%
だいたいそう思う	4	29%	5	42%
あまりそう思わない	2	14%	1	8%
そう思わない	0	0%	0	0%
合計	14	100%	12	100%



正答数(23名)	8	21	23	14	14	17	19	17	15	20	18	19	19	21		76.09	75.43
正答率	35	91	100	61	61	74	83	74	65	87	78	83	83	91			
	重要語句「夏がも」	表現の巧みさ	事実の正確な読み	順序	事実の正確な読み	事実の正確な読み	細部の読み	登場人物の心情	「印象」を書く	送り仮名	文体の統一	言い切りの形	修飾被修飾	敬語の使い方		平均正答率	平均点

しかしながら、秋の県の学力テストを見ても、正確な読みに関する設問に誤答が多く、テストなどの数字としては十分な成果が上がっているとはいいがたい。

職員は意識して「読む」授業に取り組んではいるが、十分に実績を上げられていない課題が見えてきた。がんばってはいるのだが、ベクトルがそろっておらず、授業公開や研究授業での中身が次に活かされていないことや、漢字や言語事項への取組が日常的に行われていないなどの理由が考えられる。

4．今後の課題

○　「正確な読み」という部分に未だ課題が残ることから、具体的な「読み」について、手法、ならびに読み合う学びづくりのようなところを今一度見直すことが求められると考える。また、その学びを記録し、積み重ねるという観点から、ノートづくりはとても大切である。めあてについては子どもたちと共有し、課題をもって臨む姿勢ができつつあるが、振り返りについては時間に追われ、十分に取り組めているとは言いがたい。「意味のあることがら」を短時間に文章にする訓練は、「書く」力にも通じるので、めあてや振り返りが自分のものとなるようなノート指導も必要だと考える。

○　漢字や言語事項の弱さについては、もちろん授業の中でふまえながら学ぶことが大切だが、常に身近において調べられるグッズの開発や、独自の漢字検定など子どもたちが望んで取り組みたくなるような教材作りも大切である。

○　読書については、大きな成果を上げ、いつも身近に本があるという環境が生まれ、手に取ってみるという行為から、「ひまさえあれば本を読んでいる」という子どもたちが増加中である。

○　学習ルールは一定保たれているが、「チャイムが鳴るからすわる」「勉強時間だからする」「書かないといけないから書く」という受け身の子どもたちが多いように思われる。「おもしろそう」「自分でやってみたい」「こうすればわかるよ」と、意欲的に学習する子どもたちと出会いたいと思う。授業の流れづくりの徹底や、課題の充実などにより、可能になるのではないかと考える。

○　人と交流し、自分の意見を広げるための話し合い活動が、日常的に行える学級集団作りが何よりも大切である。人の意見をしっかり聞き、自分の意見と比べることができ、新たな視点が生み出せるような活動を模索したい。

○　学習状況調査によれば、学力の 2 極化についても大きな課題となっている。授業の中はもちろん、放課後の勉強会も見直していきたい。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈良県五條市立五條中学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

平成３０年度の全国・学力学習状況調査の結果から、国語Ａにおける本校と全国平均正答率との差は６．１ポイント、国語Ｂでは４．２ポイントと昨年度に比べ全国平均を下回った。数学も同様に、数学Ａでは５．１ポイント、数学Ｂでは７．９ポイントと平成２９年度と比べて全国平均との差が広がった。数学においては、平成２８年度と比べて差は縮まっているが、依然全国平均を下回る現状である。

本校は、数年前まで、家庭での学習習慣が定着していない生徒が多くいた。生徒を対象としたアンケートでは「学校の勉強以外で、平日にどれくらいの時間勉強しますか。」、「学校の勉強以外で、休日にどれくらいの時間勉強しますか。」という項目に対して、平成２７年度は平日で１３％、休日で１８％の生徒が「全くしない」と回答した。一方、平成３０年度では平日３％、休日７％と「全くしない」という生徒が減少している。平成２８年度６月より取り組んでいる自主学習ノートの取組を継続して行った結果が現れてきたと考えられる。

本市学力向上推進委員会、あるいは本校研究委員会の課題として、以下の点があげられる。

（１）　習熟度別学習の形態など学習意欲の向上をさせることや学習環境の在り方について検討する。

（２）　自尊感情の高揚を伴った自主学習ノートの基礎・基本の定着に向けたやり方についての方途を探る。

（３）　学力の二極化の傾向が見られるので、下位層の底上げを行う授業改善をする必要がある。

（４）　授業における「見通し」、「振り返り」をさらに徹底して行っていく必要がある。

２．協力校としての取組状況

（１）　授業力の向上

「話し合い活動」による言語活動の充実を図るために、平成２８年度から取

り組んでいるホワイトボードを活用した授業を各教科で引き続き行っている。さらに、デジタル教室を３教室活用し、ＩＣＴ教育の充実も引き続き取り組んでいる。

また、今年度は、学力の二極化に対応する授業形態を構築している段階である。主に、ＴＴ体制で行っている英語、数学を中心に取り組んでいる。

英語科の授業は、二人の教師がお互いを補助し合い、生徒がより多くの英語に触れる機会を持てるという利点がある。また、机間指導がしやすく、生徒の質問やつまずきにすぐ対応することができる。さらに、英語の授業では、音読の発表や単語テストのための学習時間を、セクション毎に取り入れている。一人一人の音読を二人の教師で確認していくことで､各自の定着度合いを把握し、より適切な声かけをすることができた。生徒自身の発表回数も増え、英語をアウトプットする機会も増えた。また、生徒に単語を覚える時間を授業中に設けることで、自宅学習の習慣がついていない生徒にも学習を促すことができている。その直前の確認学習がテストの結果につながり、達成感を得る生徒も増え、効果が現れている。

複数の教師で生徒を観察し、お互いの考えをシェアしながら指導案作りをすることは、英語に対して苦手意識を持つ生徒をより深く理解していくことにつながっている。少しでも教科書の本文が読めるように、今日習った単語が書けるように、教師が生徒にとってわかりやすい授業を心がけていくことが、生徒の「わかる」という達成感を育て、「やればできる」という自己肯定感につながってきていると思われる。

数学科の授業では、生徒の意志で基礎定着のクラス、発展的内容を学習するクラスに分かれ、不定期ではあるが授業を行っている。単にクラスを分けるだけでなく、同じ単元を異なる指導方法を用いて行ったり、演習の時間の設け方を工夫したりしている。

生徒一人一人の課題に応じた授業を行うことを心がけて行っており、それぞれの課題に対する達成感を多く感じられる授業を目標に自尊感情の高揚にもつなげられるようにしている。ＴＴ体制での研究授業を行うなど、更なる授業力向上に向けて取り組んでいる。

＜ＴＴを利用した授業の様子＞

さらに、本中学校区内には２つの小学校があり、各校で年１回ずつ、合計３回の合同研修を実施し、小中交流を深め小中一貫教育についての研修を深めている。本年度は、中学校区全体を通して生徒の進捗状況について教職員全体で

話し合いをし共通理解を行った。

日時	場所	備考（教科等）	討議の柱
６月１３日（水）	阪合部小学校	国語	読む力を育むために
１０月３１日（水）	五條小学校	算数	「話す力」、「聴く力」を育てるためにどんな指導や取組を行っているか、行うか。
１１月２１日（水）	五條中学校	道徳 英語	３回の五條中学校校区を終えて、小中通じて児童・生徒につけたい力

（２）　学習内容の基礎・基本の定着

普段の授業では、基礎的・基本的な内容の確認問題を意識的に行っている。少ない範囲を指定し、その中から数問の確認問題を出題することでスモールステップを心がけ、低学力傾向の生徒を中心に「できた」という実感や喜びを積み重ねることを目的としている。基本的な内容の定着を図るとともに、成功体験によって自己肯定感を高め、学習意欲の向上につながることを期待して取り組んでいる。また、各定期テスト１週間前の放課後に補充学習（定着ステップ）を実施し、習熟度に応じた学習指導を行った。

休日の土曜を活用して行う取組としては、定期的に「土曜塾」を開講している。２週間に１回実施し、基礎・基礎的な内容を中心としている。本年度は、主に学習を苦手とする生徒を対象として、数学科、理科の意義、おもしろさを感じ、対話的な学習を取れ入れることで、生徒の学習意欲を高めるとともに、「学び」が人の生き方にどう影響しているのかを教える機会とすることを目的としている。

＜定着ステップの様子＞

＜土曜塾の様子＞

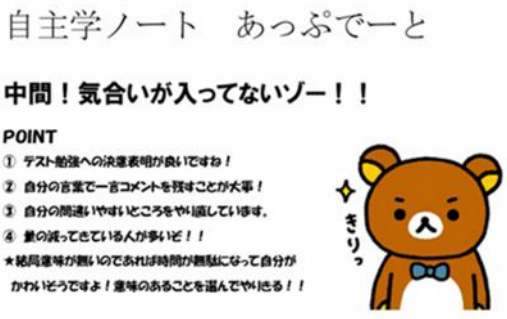
（３）　自主学習ノート

一昨年度から引き続き全学年で自主学習ノートに取り組んでいる。２年前までは、入学した１年生が内容の充実した自主学習ノートを書く習慣ができていなかった。継続して取り組んだ結果、家庭学習の習慣が定着した。これは、小

中連携の一つとして五條中学校区内の２小学校でも取り組んできた成果が中学校につながっていると考えられる。

また、生徒たちに呼びかけ自主学習ノートコンテスト委員会を立ち上げ、全校集会で表彰を行っている。この取組が、当該生徒のみならず、全校生徒の学習意欲とともに自尊感情の高揚につながっている。さらに、自主学習ノートを通じて、個々の課題に迫り、「やればできる。」という達成感を得ることで自尊感情の高揚から、自己効力感の高揚へとつなげている。

本年度は、学級での自主学習ノートのやり方について教室での掲示物について考えて取り組んだ。家庭学習が定着しつつあるなか、内容も伴った学習になるよう工夫した。



このように実際に生徒が書いた自主学習ノートを用いてポイントを掲示するなど様々な生徒のノートを紹介しながら取り組んだ。

３．取組の成果の把握・検証

（１）　授業力の向上

今年度から取り組んだ内容もあるため数値としては、まだ検証中である。本校独自のアンケートでは、昨年度との変化はあまりないが、「先生方は、いつも熱心に指導してくれている。」の質問に対し肯定的な回答が８６ポイント、「先生は黒板の書き方やプリントなどを工夫し、わかりやすい授業をしている。」に対しては８６ポイントと教員側の取り組み方を生徒が感じ取っている現状である。それぞれの教科で工夫して行っている取組を継続して行っていきたい。

一方継続して行ってきた「話し合い活動」においては、平成３０年度全国学力学習状況調査の生徒質問紙にある「生徒の間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思いますか」という質問に対して、肯定的な回答が５４．５ポイントと低い数値となっている。話し合いを通じての考えの深まりを実感できていない現状である。意味のある「話し合い活動」にするためにも教師側の課題設定をさらに検討していく必要がある。

（２）　学習内容の基礎・基本の定着

基礎・基本の定着を図る取組として、全国学力学習状況調査を考察した。その結果、全国平均正答率を数学、英語ともに下回った。

具体的には、平成３０年度の国語Ａは全国平均正答率と比較して６．１ポイント、国語Ｂでは４．２ポイント下回った。数学Ａは５．１ポイント、数学Ｂは７．９ポイント下回る結果となった。

〇設問別傾向の分析結果

①国語Ａでは、知識、語句に関する問題での誤答が目立っていた。

②「目的に応じて文の成分の順序や照応，構成を考えて適切な文を書く」問題の正答率が低かった。

③国語Ｂでは、「書くこと」の項目で全国平均解答率を上回っていた。

④国語Ａ、Ｂの問題を通して無解答率は概ね下回っていた。

⑤数学Ａでは、計算に関する問題の正答率が全国平均正答率を概ね上回っていた。

⑥数学Ｂでは、「問題場面における考察の対象を明確に捉えることができる」問題の正答率が全国平均正答率を５．８ポイント上回っていた。

⑦数学Ａ、Ｂの問題を通して計算が関わる問題の正答率が概ね上回っていた。

（３）　自主学習ノート

平成３０年度の自主学習ノートの提出率は各学年とも９０％を超え、ほとんどの生徒が自主学習ノートに取り組んでいる状況である。本校生徒の家庭学習について、独自に行ったアンケート結果は以下の通りである。

①「学校の勉強以外で、平日にどれくらいの時間勉強をしていますか。」

	平成２９年度	平成３０年度	増減
ほとんどしない	１６％	３％	－１３％
１時間以上勉強する	４６％	７７％	＋３１％

②「休日（土日・祝日）にどれくらいの時間勉強しますか。」

	平成２９年度	平成３０年度	増減
ほとんどしない	２６％	７％	－１９％
１時間以上勉強する	４２％	７６％	＋３４％

昨年度に比べて、家庭学習に取り組む生徒が増加した。本校のみならず、２小学校との連絡連携による継続した取組の成果が表れてきたと考えられる。

４．今後の課題

今後の課題として下記の３項目が挙げられる。

〇　英語、数学科だけでなく、各教科での低学力傾向の生徒を考えた授業展開をさらに行っていく必要がある。

〇　基礎・基本の定着につながる自主学習ノートの在り方を検討してく必要があ

る。

○　定着ステップ等補充学習の参加率が上がっているが、さらなる基礎・基本の定着に向けた課題設定を考える必要がある。

本校独自のアンケートの「毎日の学習に熱心に取り組んでいる」の項目では、肯定的な回答が平成２９年度は７４ポイント、平成３０年度は７７ポイントであった。年々、生徒の学習に取り組む姿勢が変化しつつあるが、その一方で、あまりあてはまらないと回答している生徒が２０ポイント、あてはまらないが３ポイントいる現状である。この回答をしている生徒の意識の変化には、今現在行っている取組を通じて、生徒一人一人の更なる自己肯定感の向上につなげる必要がある。

よって、全職員も同様に、「主体的・対話的で深い学びの学習」を更に取り組んでいく必要がある。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈良県五條市立北宇智小学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

平成 26 年度・27 年度は、「問題解決型学習」を通して、算数の基礎・基本の習得、思考力や表現力の向上､つまり「学力の向上」を目指し研究を進めてきたが、児童は、問題解決型学習を楽しむことはできたものの､学習への意欲の低さ・自信のなさが壁となり、学力の向上とまでは至らなかった。平成 28 年・29 年度は､児童自身の根底にある学習に対する意識の改善を目的として、「自尊感情の向上」を主題として研修を進め、学力向上の取組として「読書活動」「家庭学習」の研究も行ってきた。その結果、徐々にではあるが児童は以前より落ち着きを見せ、学習に対する姿勢も出来てきた。

本校の課題としてまずあげられるのが、「読解力」である。平成 29 年度の全国学力・学習状況調査や県・市等の学力調査をみたとき、国語の「読むこと」「書くこと」では、文章の中から必要な情報を見つけて読みとることや、設問の読み取りができない。また、算数においても、「数学的な考え方」「図形」「数量関係」等で、読み取りでの説明や立式などができない。これは国語・算数だけではなく、他教科でも言えることであり、文章の意図することをきちんと読み取ることができない児童が多い。また、語彙力や論理力なども十分とは言えず、文章を読解するために必要な基礎的な力も不足している。つまり、インプットした内容を自分の言葉としてアウトプットするところまでを定義した読解力の中でも、まだインプットの段階でつまずいており、まずは「読む力」を向上させなければならない。

２．協力校としての取組状況

「読む力」を向上させるための手立てとして設定したのが、「読書活動」「家庭学習」「授業改善」の三点である。

（１）児童がより多くの言葉と出会い、様々な文章に触れていく機会となる読書活動

ア　学校図書館・学習センター（Book　Cafe　Kitta）の運営

読書環境の整備、図書館だよりの発行、学習センターとしての活用などを進めた。

イ　読書活動の推進（プロジェクトブックス）

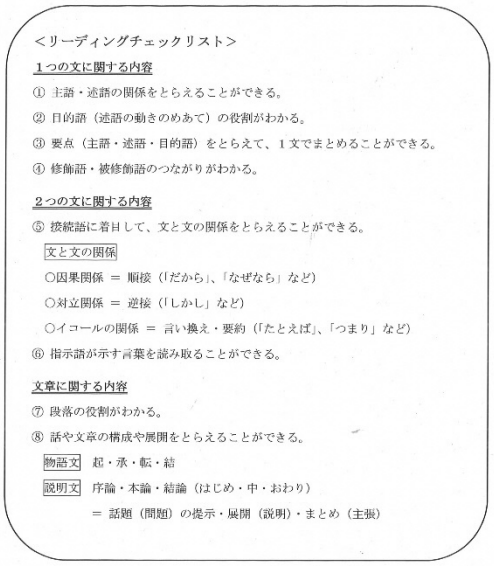
朝読、読書週間、絵本の広場など、児童が主体的に楽しめる読書活動を進めた。また小学生新聞を活用したクイズ、読書ビンゴ、読書通帳など、児童が読書をしたくなるよう手立ての工夫をした。

絵本のひろば

（２）家庭学習では、予習・復習の習慣化による基礎基本の定着や、図書館の本や新聞などを活用した調べ学習を進め、情報活用能力の育成を図った。

ア　家庭学習ノートの研究

学習の手引きの作成、ふり返りシートの検討、予習や復習（基礎基本）の徹底、調べ学習（情報活用能力）の育成、新聞やワークシートの効果的な活用を進めた。



＜リーディングチェックリスト＞

１つの文に関する内容

① 主語・述語の関係をとらえることができる。

② 目的語（述語の動きのめあて）の役割がわかる。

③ 要点（主語・述語・目的語）をとらえて、１文でまとめることができる。

④ 修飾語・被修飾語のつながりがわかる。

２つの文に関する内容

⑤ 接続語に着目して、文と文の関係をとらえることができる。

文と文の関係

○因果関係 ＝ 順接（「だから」、「なぜなら」など）

○対立関係 ＝ 逆接（「しかし」など）

○イコールの関係 ＝ 言い換え・要約（「たとえば」、「つまり」など）

⑥ 指示語が示す言葉を読み取ることができる。

文章に関する内容

⑦ 段落の役割がわかる。

⑧ 話や文章の構成や展開をとらえることができる。

物語文　起・承・転・結

説明文　序論・本論・結論（はじめ・中・おわり）

＝ 話題（問題）の提示・展開（説明）・まとめ（主張）

リーディングチェックリスト

（３）授業改善として、読解力の向上を目指した。

ア　教科書を読む授業

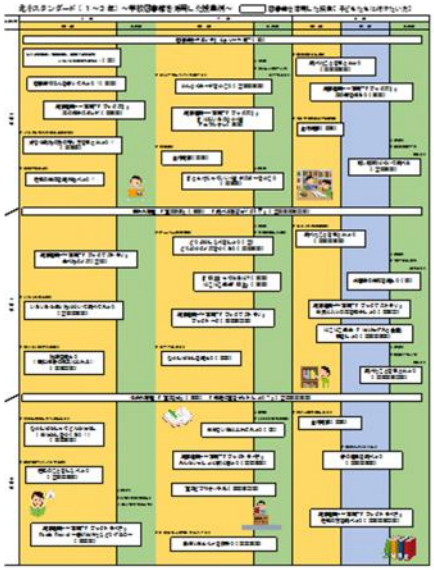
基本的な問題解決型学習を進めると共に、リーディングチェックリスト（読むときにつけたい力）等を活用した論理国語の研究を進めた。

イ　北小スタンダードの推進

Ｈ２９年度に作成した『読書活動の年間計画（北小スタンダード）』を基にした授業づくり（「調べ学習」「並行読書」など）を推進した。

ウ　公開授業

五條市教委が作成した授業プランシートを活用し、「教科書をしっかり読み、その内容を理解すること」を第一とした授業づくりをすると共に、「正確な理解」に基づく読み取り、論理的な読みができる児童を育てるための授業研究を行った。



北小スタンダード(読書活動年間計画)

３．取組の成果の把握・検証

○国語科においての児童アンケート調査では、「国語の勉強が好きだ」という肯定的な回答が１０

％増えた。また、「授業がよくわかる」という回答も９６％に上昇した。

○算数科においての児童アンケート調査では、「算数の勉強が好きだ」という肯定的な回答が１４％増えた。また、「授業がよくわかる」という回答も９２％を維持し、「算数で分からないとき、あきらめずにいろいろな方法を考える」という肯定的な回答も１０％増えた。

○読書活動を各教科に取り入れることで、児童が本を手に取る機会が増え、知識を広げ深めることができた。また、子ども達の読書への関心が高まった。ただ、休憩時間の図書館の利用者数は増えていない。

○授業改善や家学ノートの活用により、予習・復習による「基礎基本」の定着に効果を上げた。また見通しをもって家学ノートにのぞむということから、長期休暇を利用した計画的な調べ学習を、家庭の協力を得ながら積極的に進めた。その結果、子どもたちがたくさんの作品を完成させ持ち寄り、展示発表することができた。「情報活用能力」の向上に効果が認められる。

家学ノート

○自学（家庭学習）計画表の作成は、子どもの自主性や計画性を育てるためによい手立てとなった。この活動に継続的に取り組んだ学年は「自己マネジメント力」の向上が見られた。

４．今後の課題

○職員間で基礎基本の共通認識が必要である。

○子ども達が本を手にする機会は増えたが、休み時間の図書館利用者数は伸びていない。児童が主体的に図書館へ足を運ぶ方法、手立てが必要である。

○児童や家庭に読書する楽しさや喜びを、もっと伝えていかなければならない。また、自分で本を選べない児童に対する手立てが必要である。

○毎月の自学計画表の作成は、高学年では「自己マネジメント力」の向上につながったが、長期目標が立てづらい低中学年の計画に工夫が必要である。評価とふり返りは毎日していくことが大切である。子ども達に、より達成感を感じさせるようにしていきたい。

○リーディングチェックリスト（読むときにつけたい力）の学年・教科に応じた活用を進める。

○１年に満たない取組でもあり、まだまだ効果を見極める状況にはないが、学力の二極化の傾向、低学力傾向の児童の支援などを進めるうえで、今後も「読解力（書く能力）の向上」「基礎基本の定着」「論理的に読む能力の向上」を課題として、取組を行っていく。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈良県御所市立御所小学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

平成29年度の全国学力・学習状況調査の結果において、平成28年度に比べ、国語算数とも県平均との格差が縮まっており、県平均との差は国語A 2.0ポイント、国語B 3.0ポイント、算数A 0ポイント、算数B 1.0ポイントで、特に、算数において学力の向上が認められた。

本校では、国語科、算数科ともに、少人数学級編成により、一人一人にきめ細やかな指導を行うことができている。国語科においては、各学級で小テストを定期的に行うことにより、漢字の読み書きの習熟が見られる。朝の時間の読書と地域の方によるお話会により、読む力を高め、日記を書く習慣をつけることで書く力を高めている。

算数科においては、全学年で金曜日に算数SPの時間を３０分確保し、苦手な既習問題に取り組んでいる。また、毎週木曜日の朝に朝学習の時間を取り、１００マス計算に取り組んでいる。これらの取組を通して、児童の苦手領域の克服と既習学習の確実な習得につながり、児童の学習に対する意識の高まりを感じることができている。

一方で、国語B活用の長く複雑な文章問題になると正答率が大きく全国平均を下回っていた。また、無回答の児童が増えることから、文章問題に苦手意識をもつ児童がいると考えられた。

そこで本年度は難しい文章問題の「読み取り」への対策として、物語教材や説明文教材の学習に文字数制限をつけた課題や自分の考えを積極的に取り入れる課題に取り組ませていきたい。

算数科においても、領域「数と計算」の正答率が低いことから、計算問題の技能が定着されていない現状が見られる。また、正答率が県や全国の平均に近い問題でも、無回答の児童の割合が高く、学力の二極化傾向が見られる。本年度は、算数SPや朝の学習を継続していくとともに、算数の授業研究を進めていくことで、技能や数学的な考え方をさらに高めていきたい。

２．協力校としての取組状況

（１）研究主題

「探究的で協同的な学習指導の工夫」

～確かな学力と主体的実践力を身に付けた子どもの育成を目指して～

（２）学力向上基本方針

職員研修

①研修テーマはユニバーサルデザインを意識した算数の授業作り、仲間作りを意識した人権の授業作り、今年度より中学年にも導入される外国語活動の授業作り、特別支援やそのほかの一般研修の領域に分けて研修計画を進める。

②教科（算数）についての授業研３本、人権教育についての授業研１本（中学校区の授業研を含む）、市人教でのレポート報告１本（今年度中学年）、外国語についての授業研1本（今年度の市

の外国語部会発表と兼ねる。）の計6本の発表を行う。各学年で一つずつ分担し、学団で算数と人権または外国語１本ずつとする。

③授業研の２週間前に事前研を行い、教材と単元を貫く目標、授業の展開、授業を見る視点を共通理解する。可能な限り、事前研修を2週間前に行い、学年の研究授業を受け持たないペアの先生の当日計画されている授業を教員で参観する。その後に事前研を行い本時の展開を改善する。

④研修は、基本的に職員会議のない水曜日に行い、校内授業研は一日一授業とし、原則水曜日の５時間目に行う。※金曜日に行う場合は6校時に授業を行う。

※今年度は、授業研当日の5校時に全校で自習体制を組み、通常通り14:20に全校で下校する。その後研究協議を行う。

⑤授業案および指導案については、低中高の学団で検討し、作成する。若手の先生の授業力向上を念頭に置いて授業者を決定する。

⑥指導案作成の流れは２週間前に講師先生に指導を仰ぐ。事前研で検討し指導案を完成させ講師の先生に送る。

⑦授業研当日の記録、事前研、研究協議の計画、司会進行は授業研究グループで行う。

⑧夏期研修報告会を実施した。講師を招くなど夏期研修会の充実を図る。

⑨外国語活動が中学年にも導入されるということで、新たに外国語活動推進委員会を作り、年間の研修を計画していく。主に、授業力の向上や教材研究と移行期間の年間計画の作成を行う。

学力向上

⑩早期に児童の実態把握を行うために一昨年度の県の学力テスト（前学年の問題　5年→4年の問題）を５月中に実施し、考察を紙面で報告する。

一昨年度のテストを行い、推移を考察する。毎年のテストをデータとして残し、数年ごとにテスト内容を変更していく。※６年生は４月の学力状況調査を考察する。

⑪５月に行うテストの考察と、昨年度の考察を参考に朝学習や算数SPで補充学習を行う。

⑫11月に行われる県の学力テストの結果を考察、5月のものと比較考察する。

前年度、今年度の結果を比較、考察したものを次年度に引き継ぐ。

⑬今年度から朝学習を朝会と読書タイムのない火・木・金曜日に実施する。昨年度は算数科を重点的に実施したが、今年度より外国語活動が15時間増え、その分の国語科を振り替える必要である。朝のモジュールを用いるために週に1、2度は国語科を実施する。

⑭「算数ＳＰ」を行事のない金曜日に実施する。現時点では年間22回、6月15日（金）から開始。それまでの金曜日は特別校時で通常より早く下校。

ただし、９月については児童の体力面と、応援団の練習時間確保のため算数ＳＰをなくし、通常校時（月火木校時）に変更する。

※詳しい計画、内容は基礎学力向上グループの話合い後に提案。

⑮家庭と連携し、学習習慣や学習規律の改善を図る。

家庭学習の手引きや自主学習のすすめ、御所小学校の学習のルールなどを家庭に配布し、保護者への啓発を図る。今年度は基礎学力向上グループの話合い後に提案する。

⑯UDを意識した教室掲示や学校掲示を充実させる。今年度は、できる範囲で、学年で掲示物や算数コーナーの設置を負担のないように行う。

⑰中学年と高学年の15時間の外国語活動は2学期より国語（図書）の時間の2週に一度実施する。1学期の間に外国語活動推進グループ中心に職員研修を行う。

（３）授業研究と研究協議

○　６年算数科　面積の求め方

単純な公式では解決できない面積を求める。

○　５年算数科　単位量あたりの大きさ

調べてみたい、比べてみたい近畿２府６県の○○あたりの量

○　研究協議

討議の柱を明確にし、ビデオカンファレンスやグループディスカッションを行う。

○　３年生　外国語活動

「　This　is　our　pizza　」

３．取組の成果の把握・検証

（１）奈良県学力診断テストより

現４年生

学年	数と計算	数量関係	図形	量と測定
2017　3年5月	81.8%	80.0%	85.2%	69.3%
2017　3年11月	64.4%	50.0%	62.9%	67.0%
2018　4年	58.3%	49.4%	66.1%	52.4%

現５年生

学年	数と計算	数量関係	図形	量と測定
2017　4年5月	73.5%	51.5%	71.3%	78.4%
2017　4年11月	68.2%	50.9%	67.1%	78.9%
2018　5年	63.3%	67.9%	79.5%	56.4%

現６年生

学年	数と計算	数量関係	図形	量と測定
2017　5年5月	66.0%	57.9%	58.3%	65.3%
2017　5年	63.0%	71.9%	72.9%	38.2%
2018　6年	77.0%	61.8%	77.8%	59.6%

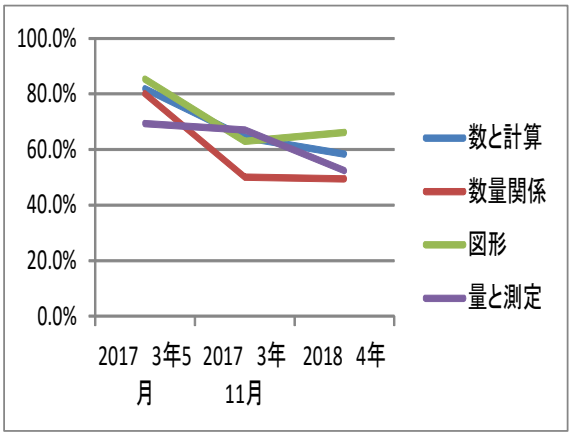
１～６年生

学年	数と計算	数量関係	図形	量と測定
2017　全学年	65.6%	59.1%	65.7%	65.0%
2018　全学年	74.4%	66.4%	76.2%	68.1%

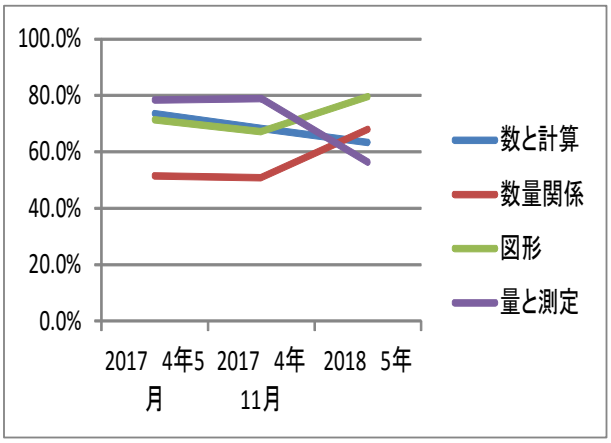
４～６年生

学年	数と計算	数量関係	図形	量と測定
2017　高　5月	73.8%	63.1%	71.6%	70.3%
2017　高　11月	65.2%	57.6%	67.6%	61.4%
2018　高	66.2%	59.7%	74.5%	56.1%

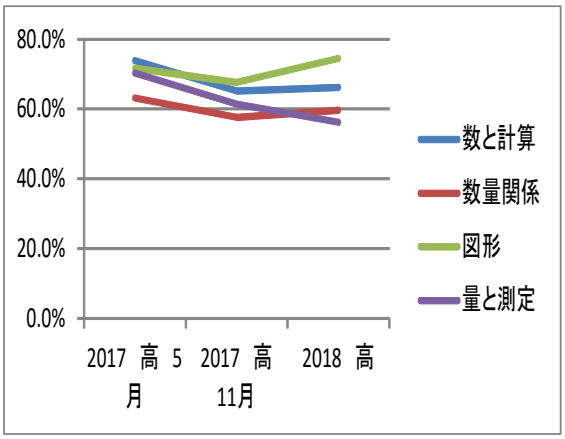
現４年生



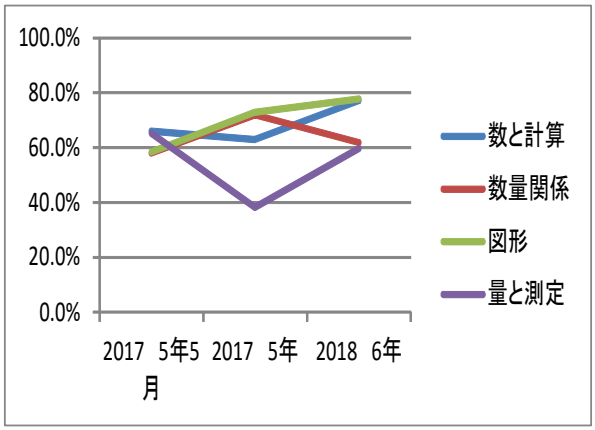
現５年生

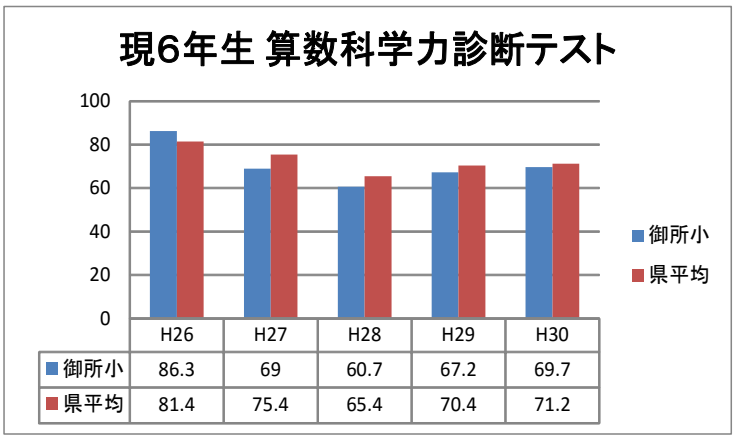


現６年生



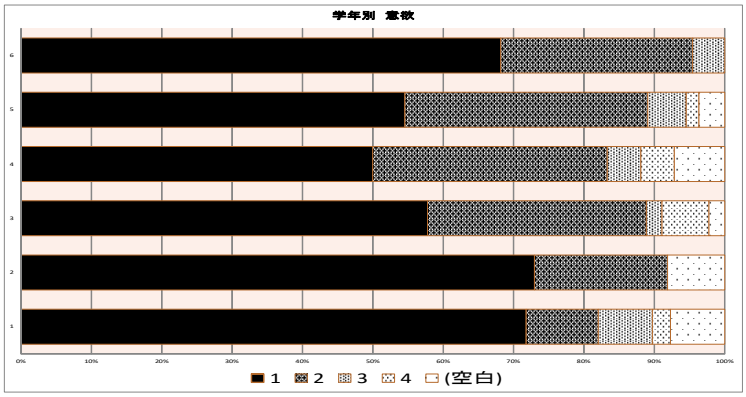
４～６年生





	H26	H27	H28	H29	H30
御所小	86.3	69	60.7	67.2	69.7
県平均	81.4	75.4	65.4	70.4	71.2

・２０１７年５月の学力診断テストは、前学年の問題（問題は一昨年度のものを活用している）を使用し、前学年１１月からの学力向上の成果を見るために行っているので、各領域とも比較的正解度が高い。
・現５年生と現６年生は、２年間算数専科と担任との少人数指導体制を組み、個別やグループ別に丁寧に指導を行ってきている。２学年とも総合的な学力の伸びが見られるが、「量と測定」「数量関係」の領域で正答率が低い傾向にある。
・研究協議でも明らかになったが、児童は、数字が表す「量感」に関しての認識が出来ていないように感じる。分数や小数の量感、面積が表す量感、さらに長さに対する量感である。また、「割合」で表された問題に対する考え方が定着していない（６年生）児童が多い。
・分数や小数などの基本的な四則計算や図形の面積を求める問題には比較的正答率が高い。



・２０１６年よりこの「算数アンケート」を実施し、算数科に対する児童の意識と学力の関係を分析している。特に、問題解決に至る主体性や協同学習の成果について、県の学力診断結果との関連を考察している。低学年で算数の学習に意欲的に取り組んでいた児童は３～４年生になり分数や小数の導入などで難易度が上がるにつれ算数科学習に対する意欲が低下する。しかしながら、高学年になると、算数の楽しさやおもしろさに気づくことで関心が高くなる傾向にある。また、それが学力の向上に結びついているところもある。

４．今後の課題

・算数科に対する児童の意欲は、中学年が一番低い。これは、分数や小数の概念がはっきりつかめず、量感的にも認識できない児童が多いことが原因として考えられる。「量感」を感じさせる学習指導の工夫を研究していかなければならない。一方、学習に対する意欲は５年～６年になるに従って向上している。これは、算数科による少人数指導や算数専科教員の配置による学習指導の工夫によって、「考えることの楽しさ」を味わわせることに力点を置いている成果だと考える。これまで培ってきた知識や考え方で、「何とかこの問題が解けないか」と粘り強く考える体力を付けていくこと、出来たときの「スッキリ感」を味わわせて行くことが、算数科に対する楽しさに繋がっている。ただそのためには、教員の授業力の向上と授業時間の確保が必要である。さらに、家庭学習などで児童自らが主体的に取り組むよう「しかけ」ていかなければならない。
課題の出し方や、協同的な学びの創造に取り組んでいきたい。

・高学年での伸び悩みは、低学年～中学年の基礎的な学習の習得に大きく左右されると考える。児童の意欲の下降でも明らかなように、学年が進むにつれて算数科に対する不安感や苦手意識が増している。そのことが知識の習得に大きく影響していると考える。前述したように、ただ単に数字の四則計算に主体をおいた学習は、数字のもつ「量感」が育たないだけでなく、算数科に対する苦手意識を増幅しかねない。低学年から、数字の持つ意味を理解する学習や「考えることの楽しさ」を味わわせる学習指導を工夫することで基礎知識を定着させ、高学年につなげなければならないと考える。

・この２年間、本校では算数の少人数指導に重点を置いた学習指導を行ってきた。研究主任、算数専科教員が中心になって全教職員が共通認識しながら、児童の実態に即した指導方法を研究し、「ノート作り指導の研究」「振り返り学習の定着」「算数教室の充実」「業前の算数タイムの導入」「算数スペシャルタイムの導入」「主体的に考える算数に重点を置いた授業の創造」などを行い、一定の学力向上の成果を見出している。
しかしながら、依然として「学習低位層」にいる児童の学力向上は大きな課題である。一方、主体的な学習や協同的な学習を積み重ねる中で、「考える楽しさ」を感じ始めている児童も少なくない。ただ、基礎的な知識が定着していないため、どのように考えたら良いのかという筋道が立てられないのである。そこで、基礎学力を着実に積み上げていけるカリキュラムマネジメントの構築と児童自らが意欲的に取り組もうとする授業の創意工夫の二本柱を研究の柱に据え、「学習対効果」の高い取組を推進していきたいと考える。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈良県御所市立御所中学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

平成 29 年度より全校体制での取組を始める。これまでは「落ち着いて授業を受ける」という学習規律の確立により学校の安定をはかってきたため、授業は教員から生徒への一方向のものが多く、生徒たちは受け身の学習に慣れてきた。しかし、変わりゆく社会を生き抜く力を子供たちにつける必要性を強く感じ、「主体的な学びを引き出す授業づくりの工夫」をテーマに、教員の意識改革と授業づくりを中心に取組を始めた。

平成 29 年度の全国学力・学習状況調査結果では、国語・数学ともに、正答率８割以上の生徒の割合は全国平均より７～８ポイント低く、またＢ問題における正答率３割以下の生徒の割合は全国平均より高くなっており、特に数学Ｂではその差が 20 ポイントにもなる。全体に学力が低く、特に活用問題に対応できない生徒が非常に多いことが分かる。また、平成 29 年度の中３の１年時の県学力・学習状況調査から３年時の全国学力・学習状況調査結果の経年変化をみると、国語・数学ともにマイナスに動いている。生徒質問紙の結果より自尊感情が低く、勉強に対する不安が大きいこともわかる。

しかし、「数学の勉強が好き」、「数学の勉強は大切」、「数学の授業の内容はよく分かる」、「数学の授業で学習したことは、将来役に立つ」などの項目で全国平均を上回っており、授業はじめの「毎日計算」や学び合いなど一人一人を大切にした丁寧な取組の成果も見られる。

このように、数学の学習に対する前向きな気持ちがありながらも結果につながらない現状があることもあり、数学だけでなく全ての教科等において、一人一人を大切に、みんなが参加し、分かる授業づくりを目指して学力向上プロジェクトチームを発足させた。

２．協力校としての取組状況

①　授業改善

- メロディチャイム（始業２分前のチャイム）を導入し、授業の準備、着席を意識させ、始業のチャイムと同時にスムーズに授業が開始できるようにする。
- 朝の学活の時間を利用し、朝読書を始め、読書習慣の定着を図る。
- 一人一人を大切に、みんなが参加し、分かる授業を目指す。そのために、「めあて」を提示し、生徒に「見通し」を持たせるとともに、「ふり返り」を意識した授業づくりを進

める。

・　学習意欲を高めるＩＣＴの活用を行う。

・　定期考査前等の放課後の学習会や長期休業中の各学年や各学級の学習会を充実させる。

②　学びを引き出す仲間づくり

・　生活班を中心に、人間関係を深め、コミュニケーション能力を高める。

・　教員の「問い力」を向上させ、生徒の学びを引き出すような学習活動につなげる。

③　学力向上プロジェクトチームを中心とした職員研修（１回）、校内授業研究（３回）、市内の教科授業研究（３回）を積極的に受け入れ、わかる授業づくりを目指して取組を進める。

・　７／６（金）数学科　授業研究

・　８／１（水）職員研修「主体的な学びを引き出す授業づくりの工夫」

・　９／26（水）市社会科部会　公開授業

・　11／１（木）県初任者研修　保健体育科公開授業

・　11／７（水）校区授業研究会　公開授業

・　11／22（木）市音楽科部会　公開授業

・　１／17（木）先進地視察（茨木市立三島中学校）

・　１／30（水）数学科　授業研究

【８／１（水）職員研修から】

＜講義＞　茨木市立三島中学校　中川　翔伍先生

○　三島中学校が平成 24 年度から継続して取り組んできたことについて

・　とてもしんどい時期があったが、生徒指導や授業を大切にしていく取組を継続して行ってきた。

・　校歌を使用した２分前のメロディチャイムを実施し、チャイムと同時に授業を開始することを徹底。

・　教師用の授業時の約束を全教室に掲示し、授業に取り組むようにしている。

・　生徒用の授業時の約束「学びのステップ」も全教室に掲示し、聞くことや話し合うこと、発表することを大切にしている。

・　学習の目標やポイント等をラミネートし、マグネットで掲示できるようにしている。

・　どの生徒にもやさしい授業の工夫として、数学においてもグループ学習を行い、グループで意見交流をする時間やボード使って話し合うこと、発表する時間等を取っている。毎回の授業ではできないが、導入の時等で行っている。各グループから様々な意見が出され、互いに交流ができる。

＜グループ協議＞

○　本日の講義を受けての感想や質問等から

三島中学校では、教員の異動にともなう入れ替わりもある中、職員研修等を重ねながら学力向上の取組を進め、成果が現れてきたとのことである。転勤してこられた先生とのコミュニケーションを大切にし、その先生の話や意見を取り入れていくことや授業規律を大切にするために授業中の教師の見回りや生徒との関係づくり等を学校全体でチームとして取り組まれたということを聞かせていただいた。

＜各学年に分かれて協議・発表＞

○　今後、本校でどのように生かすことができるか

・　１年・・・「授業時の約束」を本校に合うようにアレンジし、掲示して取り組んでいきたい。

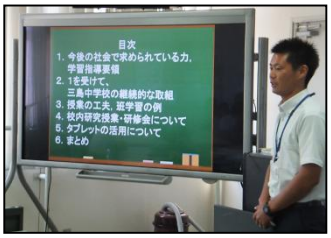
・　２年・・・基本的なことやできることをしっかりやっていくことが大切である。これからも一人一人の生徒を大切にしていく。

・　３年・・・めあてをしっかりと示していくことが大切である。課題はあるが、低学力の生徒への手立てを考えていく。

＜講師の先生から＞

・　授業時の約束（教師用）や授業時の約束「学びのステップ」は、試行錯誤し、いろいろな先生の意見等も取り入れながら、今の形になった。

・　今の取組を今後、経験の浅い先生や新しく転勤してこられた先生に伝えていくことが大切である。その学校やその時に合ったものに作り替えることも大切である。



３．取組の成果の把握・検証

○　目に見えるような成果はまだ見られないが、職員研修や授業研究を重ねることで教職員の意見交流が活発に行われるようになってきた。

○　職員研修等を通して、授業の「めあて」や「見通し」、「ふり返り」を意識した授業づくりに取り組んでいる。三島中学校の「授業時の約束」を本校に合うようにアレンジし、教室に掲示している学年もある。

【全国学力・学習状況調査の結果から】

（問題別調査結果）

		国語A：主として知識					
		2018			2017		
		平均正答率（%）			平均正答率（%）		
		御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）	御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）
学習指導要領の領域等	読むこと	72.4	76.7	76.7	69.0	74.4	73.8

		国語B：主として活用					
		2018			2017		
		平均正答率（%）			平均正答率（%）		
		御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）	御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	40.8	48.8	50.3	40.0	53.9	55.9
	言語についての知識・理解・技能	44.7	46.5	49.2	28.2	39.6	41.4

○　問題別調査結果では、「読むこと」、「国語への関心・意欲・態度」、「言語についての知識・理解・技能」の項目が昨年度に比べ、正答率が高くなっている。

低学力傾向の生徒が多いが、その中でも真面目にコツコツ取り組める生徒が多いので、国語力の基本となる漢字や言語に関する知識を養うため、ワークや漢字プリントを授業のなかで活用し、学力向上に努めている。

（問題別調査結果）

		数学A：主として知識					
		2018			2017		
		平均正答率（%）			平均正答率（%）		
		御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）	御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）
学習指導要領の領域	数と式	63.6	71.7	71.1	62.6	71.1	70.4
	図形	61.1	69.3	69.1	60.4	66.9	66.0
	資料の活用	57.6	62.0	63.5	45.9	57.1	57.6
評価の観点	数学的な技能	62.9	70.3	70.4	59.5	68.8	68.2
	数量や図形などについての知識・理解	55.1	63.6	63.3	54.4	60.3	60.2
問題形式	短答式	63.2	71.0	70.7	54.4	63.9	63.4

		数学B：主として活用					
		2018			2017		
		平均正答率（%）			平均正答率（%）		
		御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）	御所中学校	奈良県（公立）	全国（公立）
学習指導要領の領域	数と式	40.5	51.0	51.4	38.8	45.3	46.3
	関数	40.8	51.2	52.8	39.9	50.8	50.8
評価の観点	数学的な見方や考え方	34.5	44.6	45.1	30.2	36.4	36.8
問題形式	選択式	53.9	60.2	61.5	47.7	53.3	53.8
	記述式	17.6	27.5	27.9	15.3	21.5	21.7

○　問題別調査結果において、数学Ａでは、「数と式」、「図形」、「資料の活用」等、６項目が、数学Ｂでは、「数と式」、「関数」、「数学的な見方や考え方」等、５項目が昨年度に比べ、正答率が高くなっている。

各クラス低学力の生徒に関しては、抽出の少人数授業を行い、基本的な計算問題から解けるように学習を進めている。また、学級では演習時間を多くとるようにして、教え合いや学び合いができるようなグループ学習を取り入れている。

H28 県学力・学習状況調査と H30 全国学力・学習状況調査の県平均との格差の比較			
国語Ａ（基礎）	国語Ｂ（活用）	数学Ａ（基礎）	数学Ｂ（活用）
6.1 ポイントの伸び	1.8 ポイントの伸び	3.0 ポイントの伸び	1.4 ポイントの伸び

○　中学１年時の県学力・学習状況調査（H28）の本校と県平均との格差と中学３年時の全国学力・学習状況調査（H30）の本校と県平均との格差を比較してみると、どのテストでも、県平均との格差は縮まってきている。特にＡ問題（基礎）での伸びが見られる。

４．今後の課題

○　学校全体としては、教職員の授業改善に向けた実践を把握するためにアンケートを行い、その結果を校内で共有していくことや、職員研修等を通して、モデルとなる授業を提示していくような取組を進めていくことが必要である。特に、授業の「めあて」や「見通し」、「ふり返り」を意識した授業づくりをさらに全体で共通理解しながら進めていくことが必要である。

○　国語において、漢字の知識や言葉の意味などは、努力の成果が表れているが、それを文章の中で活用して自分の考えを述べるにはまだ至っていない。今後はそういった問題を数多く解いて、考えの伝え方を学ぶ必要がある。

	2. 数学の勉強は大切だと思いますか	
	「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合（%）	
	2018	2017
御所中学校	81.6	83.6
奈良県（公立）	78.6	77.7
全国（公立）	83.6	81.1

○　「数学の勉強は大切である」と考えている生徒の割合が高いため、その意欲や気持ちが学習につながるような、達成感や興味がもてるような授業展開にしていく。その１つとして、教え合いや学び合いをさらに発展的にしていく必要がある。

	6. 理科の勉強は大切だと思いますか	
	「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合（%）	
	2018	2017
御所中学校	73.6	
奈良県（公立）	63.6	
全国（公立）	70.6	

	5. 理科の勉強は好きですか	
	「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合（%）	
	2018	2017
御所中学校	51.3	
奈良県（公立）	55.5	
全国（公立）	62.9	

	7. 理科の授業の内容はよく分かりますか	
	「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合（%）	
	2018	2017
御所中学校	63.2	
奈良県（公立）	67.5	
全国（公立）	70.0	

○　「理科の勉強は大切だと思いますか」の項目では県や全国の値を上回っているが、「理科の勉強は好きですか」、「理科の授業の内容はよく分かりますか」等の項目では、県や全国の値に対して低い傾向である。実験や観察、発表する等、生徒自身が積極的に活動する機会をさらに増やしていく必要があると考える。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈良県宇陀市立榛原小学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

本校ではこれまで数年間「ユニバーサルデザイン」の授業づくりを行い、一人一人が「わかった・できた」という達成感を味わうための多様な学びの研究を行ってきた。その成果として、昨年度は日々の授業に前向きな姿勢で臨む算数好きな児童が、全ての学年で増えた。しかし「算数好き」は増えたものの、学力テストの点数の伸びには結びつかず、Ａ問題では前年度を下回る結果となった。

２．協力校としての取組状況

今年度は、昨年度に引き続き、授業部会と専門部会による研究体制をとった。そして、「後半の問題になると無回答率が高くなる傾向がある」という全国学力・学習状況調査の結果をふまえ、問題文を速読し内容を理解する力をつけようと、読書活動に重点をおいた。特に、多読を奨励し読書量を増やそうと進めた。

写真①

写真②

写真③

（１）授業部会の取組

・「学習課題をつかむ」→「各自で考える」→「ペアやグループで考えを伝え合う」→「全体の場で発表する」→「学習内容を振り返る」という学習の流れを大切にした授業を行った。また、学習内容を振り返った後、理解の定着という意味で練習問題に取り組む時間も設けた。

・ワークシートや黒板の掲示教材（写真①）は、教科書と同じイラストや形を取り入れることで、黒板を見ても机の上を見ても今どこを学習しているのか、何について考えているのかが一目でわかるようにした。

・自分の考えに自信をもったり、様々な考え方を交流したり、正解を確かめたりするために、ペア学習（写真②）の形を積極的に取り入れた。また、自分の考えを伝えるために、友だちの前で発表する場を設けた。ホワイトボードやＩＣＴ機器を活用（写真③）して発表したり聞いたりする方法が定着した。

（２）専門部会の取組

・昨年度行ったアンケート調査を１２月に行い、昨年度と今年度の児童の状況を比較することにより、経年の研究成果を検証しようと考えた。

・今年度は昨年度に引き続き、学習意欲の向上を目指した自主学習の方法（図②）をプリントにして家庭に配付すると同時に、榛原小版「家庭学習の手引き」のパンフレット（図③、④）を作成した。家庭で親子が見る時、

図 ②

シンプルで見やすく、低中高を見通して大事なことがわかるようにした。また、裏面には自分がどのタイプで何が必要なのかわかるようにした。新年度に全校児童に配付予定である。

図 ③

図④

（３）公開授業研究

全教員が部会内研修という形で研究授業（公開授業）を行い、指導力の向上を目指した。授業研究では、日ごろ活用している教具等の有効性を確かめるとともに、新たな手法を日ごろの授業に広げることを目的とした。そして県教育委員会 北村貴之指導主事を講師に迎えて低・中・高学年で１人ずつの全体公開授業を実施し、研修を深めた。（写真④）

写真④

（４）読書活動

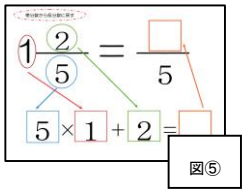
今年度は、部会の活動とは別に、全校体制で読書活動の推進に取り組んだ。児童各自が読書冊数の目標を決め、読書カード（読書の記録）を作成した。そして、隔週金曜日に読書タイムを設けて読書の時間を増やしたり、学級や図書委員会で読書に関する掲示物を作成したりするなど児童の読書意欲の向上に努めた。

３．取組の成果の把握・検証

（１）授業部会

・ペア学習やグループ学習での自分の考えの深化や伝達、振り返りの時間を設定してのその授業内での学習内容の理解が定着してきた。

・ヒントカード（図④）は、必要と思われる児童に対して指導者がその都度提示するのではなく、全員が持っておいて児童が必要と思うときに使用できるようにしていく。



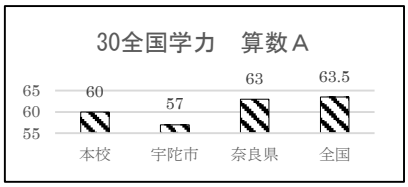
図⑤

（２）専門部会

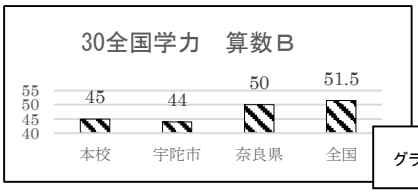
・アンケートでの「算数の問題を解く力の現状意識」について、高学年になると計算・図形などの問題ができると答えた児童が増えている。これは昨年からの「基礎基本の力の充実」に力を入れてきた成果が現れていると考える。

・自主学習で、興味を持ったことがらについてまとめた児童のノートを掲示して紹介したところ、参考にして取り組む児童が増えた。自分のやり方に自信を持ち、自主性が高まるという意味でも大変効果的であった。

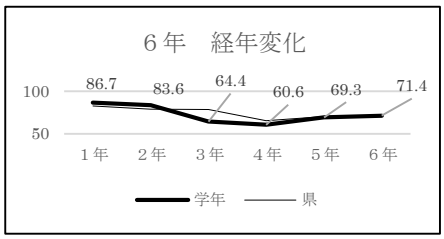
・全国、県、市の学力学習状況調査の結果や県の算数教育研究会が実施している調査の結果では、本校児童の顕著な学力向上の状況は見られなかった。（グラフ①～④）



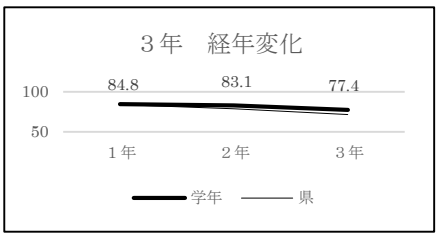
グラフ①



グラフ②



グラフ③



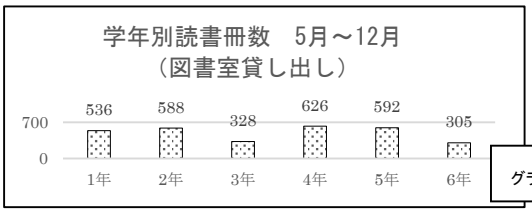
グラフ④

（※グラフ③～⑤は、県算数教育研究会が実施している学力調査の経年変化）

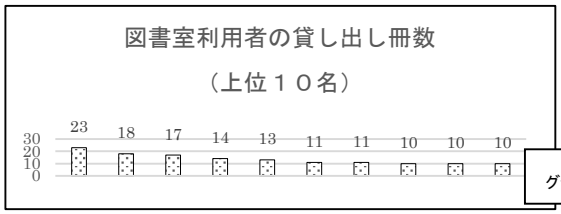
（３）読書活動

・今年から保護者による図書ボランティア（写真⑥）が創設され、今まで借りられなかった昼休みに図書室に行って本を借りる児童が増えた。１２月時点で、図書室や学級文庫を利用して個人で７０冊以上読む児童や、年間合計１０００冊を超える学年が４学級あった。（グラフ⑤、⑥）

写真⑥



グラフ⑤



グラフ⑥

４．今後の課題

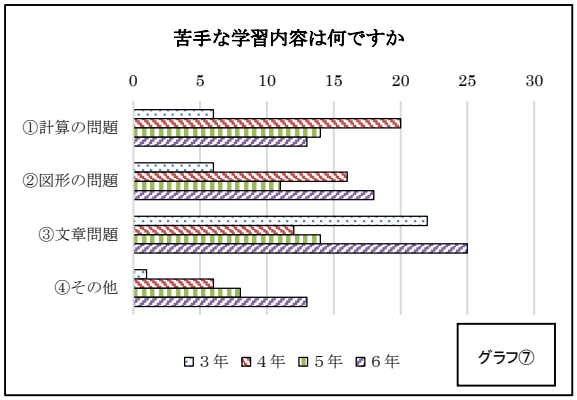
（１）授業部会

学力向上に取り組む中で、榛小デザインプランの改善やペア学習、振り返りの時間の設定などの学習方法が定着してきた。今年度は、まず読むことに対する抵抗感を取り除くということから、読書に着目して進めてきた。来年度は、この流れを継承しつつ、問題文の意図を正確に読み取り、適切な解答を導く「読む力」を育てていかなければならないと考える。そのためには読書量を増やす以外にどんな方法があるのか、研究していく必要があるだろう。

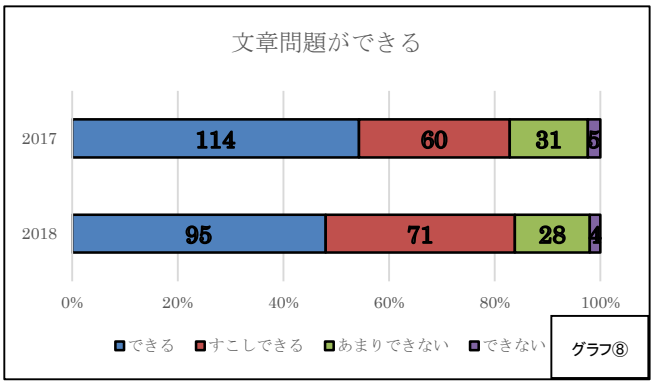
（２）専門部会

・算数で「苦手な学習内容は何ですか」の問いに、「文章問題」と答えた児童の割合が多かった（グラフ⑦）。同じように「文章問題ができる」で「できる」と答えた児童が減っている（グラフ⑧）。これらのことは、文章問題に対して自信がない表れでもあると考える。苦手意識の解消とともに、この問題は四則のどれを使えばよいのか、問題文の意図を正確に読み取り回答に結びつける力を付ける取組が必要である。

・児童個々の特性により、宿題をやってこない児童や丁寧に取り組めない児童がいる。保護者の支援が大きく影響している部分もあるように感じる。児童自身に自分から進んで取り組むようなアプローチを行うとともに、保護者への家庭学習の重要性についても啓発していく必要がある。



グラフ⑦



グラフ⑧

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈良県宇陀市立菟田野小学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

本校の平成２９年度全国・学力状況調査の結果は、国語Ａ７５ポイント・国語Ｂ５６ポイント・算数Ａ７２ポイント・算数Ｂ３９ポイントであり、国語はほぼ全国平均並であるが、算数は全国平均を６ポイント前後下回っていた。これを領域等で見ると、国語では「読むこと」「書くこと」が全国平均を下回り、算数では「量と測定」「数と計算」「図形」が全国平均を下回っていた。

本校の学力向上委員会では、平成２９年度全国学力・学習調査の問題と結果を分析し、児童の学力に関する課題を分析した結果、文章の意味を正しく読み取る力や、自分の考えを明確にして書く力に課題があり、それは国語のみならず、算数においても根本的な学力上の課題となっていると分析した。

また、平成２９年度宇陀市生活行動・学習活動調査では、５年生において学校の授業時間以外に普段ほとんど学習しない児童が２３％と、宇陀市で最も多い結果であった。これは、学習意欲や家庭での自主的な学習習慣に課題があり、児童の学力につながる課題であると考えた。

２．協力校としての取組状況

こうした本校児童の学力に関する課題を受けて、平成３０年度、「自分の考えを明確に表現する児童の育成」～書く力を育てる学習活動の創造～を研究主題にあげ、国語科の書く力の育成に取り組んだ。

①基礎学力の定着を図るための「学びタイム（朝の業前１０分間）」の活用

○全校読書（火曜日・水曜日の朝１０分間 / 毎日、５時間目までの５分間）

○全校１００マス作文（木曜日←書き慣れることを目的として）

○算数の反復練習や補習（金曜日）

②校内研修及び部会研修の充実

５月１６日（校内研修）　国語科学習指導法　講師：県指導主事　川西聡弘先生

６月２８日（校内授業研究会）　第３学年　ほうこくする文章を書こう

第６学年　表現を工夫して書こう

指導助言　学校教育課指導主事　川西　聡弘先生

８月　１日（校内研修）「書くこと」の学習活動の取組

講師　橿原市立畝傍東小学校　早川　賀英子先生

９月２６日（部会別研修）　第４学年　クラブ活動リーフレットを作ろう

指導助言　宇陀市教育委員会指導主事　小松原　大吾先生

１０月１７日（校内研修）「書く力」を育てる場、「書く力」を育てるための三つの視点

講師　奈良教育大学教職大学院　東畠　智子先生

２４日（部会別研修）第１学年　よく見てかこう
指導助言　　宇陀市教育委員会指導主事　小松原　大吾先生
１１月２８日（校内授業研究会）　第２学年　分かりやすくせつめいしよう
第５学年　理由づけを明確にして説明しよう
指導助言　　学校教育課指導主事　川西聡弘先生

③指導力の向上（UDA スタンダードの実践）

・主体的・対話的な学び

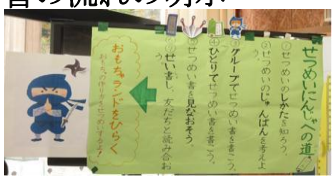
・ペア学習やグループ学習なども取り入れて、友達の良い表現方法を学んだり、友達から助言をもらったりした。また、できあがった作品を読み合い、感想を交流した。

学習形態の工夫

・授業のユニバーサルデザイン化

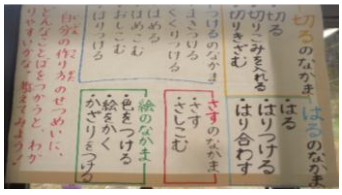
・めあてを示し、この時間に何を学習するのかを明確にした。
・大型テレビにデジタル教材などで視覚的に示すようにした。
・指示を短く、具体的に、板書の量や書く位置、チョークの色の配慮など工夫。
・学習の流れを明示しモデル文や作品を紹介して、学習の見通しを持たせた。
・表現に必要な語句や手掛かりになる表現の仕方を掲示した。

学習の流れの明示



板書の工夫

語句や表現の仕方の掲示



④家庭学習の充実

「家庭学習の充実に向けて（保護者向け）」と「家庭学習のヒント（児童向け）」【資料１】を配付し、家庭学習の進め方や内容を紹介。「生活習慣や学習習慣のアンケート」を保護者と児童に実施。【資料２】結果は保護者に開示し、生活習慣と学習習慣を啓発【資料３】

【資料１】

【資料２】

【資料３】

⑤放課後学習の実施

低学力傾向の児童（各学年２名程度）に対して、放課後指導の先生による個別指導を実施。（火曜・木曜の放課後。補習や反復練習、宿題の補助など。）

⑥中学校との連携

８月　合同研修（小中共同の９年間の児童生徒像の育成に向けての確認）
１２月　合同研修（児童生徒の実態から見える課題や今後について）

３．取組の成果の把握・検証

学びタイムを活用し、全校一斉で行った朝読書や昼読書は、自主的に読書をしない児童にとっては、文章に触れる貴重な時間となった。この短時間の読書タイムで、文章の意味を正しく読み取る力や自分の考えを持つことができたとは言い難いが、全員が集中して読書をし、落ち着いて次の学習に向かうことができた。

今年度は、「自分の考えを明確に表現する児童の育成」～書く力を育てる学習活動の創造～を研究主題にあげ、国語科の書く力の育成に取り組んだ。まず、「書くこと」に対して苦手意識をなくし、書き慣れることを目的として、全校で１００マス作文に取り組んだ。年間通して取り組み、回数を重ねたことで「書くこと」に慣れ、何かしら書こうとする姿が見られ、この１年間で書く量も増えてきた。また、苦手意識のある児童に対しては、モデルとなる書き出しや文末の書き方を示したり、友達が書いた作文を学級で紹介したりした。そうすることで、なかなか書けなかった児童も少しずつ書き進めるようになってきた。

また、国語科の「書く」の授業にも力を入れて、授業研究してきた。どの子も書けるようにするには、「どんな手立てが必要か」を学年部で話し合い、授業を公開して全職員で協議してきた。「誰に何のために書くのか」という相手意識や目的意識をしっかりと持たせるために、学習の流れを明示しモデル文や作品を紹介することで、ゴールが明確になり学習に意欲的に取り組むことができた。自分で考えて書く活動の手立てとしては、表現に必要な語句や手掛かりになる表現の仕方を掲示しておくことで、文章で使える語句が増え、書き進めることができるようになった。さらに、ペア学習やグループ学習なども取り入れることで、書く内容を膨らませる場面では、何を書けば良いのかが明確になった。また、推敲する場面では、友達の良い表現方法を学べ、友達から助言をもらうことができた。交流する場面では、多様な文章に触れることができ、達成感を持たせることもできた。

これらを取り組んだ結果、４月と１２月のアンケートの比較では「国語が好き、まあまあ好き」と答えた児童の割合は６８％から７８％と増加している。また、「書くことが好き、まあまあ好き」と答えた児童も６０％から６８％と増加している。その理由として「書き方が分かるようになったから」「書けるようになったから」「友達や先生に読んでもらえるから」などが挙げられた。書き方が分かること、書いた作品を読んでもらったり聞いてもらったりして人に認められることが、「書くこと」の意欲には欠かせないと考えられる。

家庭学習の充実を図るために、「家庭学習の進め方」を配付したり、保護者や児童に対してアンケートを行ったりすることで啓発に努めた。さらに、自主学習にも取り組んでいきたいと考え、「家庭学習のヒント」を配付し、学年に合った学習内容を紹介した。実際、宿題以外に自主学習をしてくる児童は３割程度であるが、自主学習に熱心に取り組む姿を褒めたり、工夫して自主学習しているノートを紹介したりすることで、少しずつ自主学習に取り組む児童も増えてきている。

４．今後の課題

１００マス作文や授業研究に取り組むことで、「書くこと」に対する苦手意識が減り、書く量が増えた一方で、県の学力テストの「書くこと」は、県平均よりも下回っている。これは、条件に合わせた書き方に慣れていなかったり、資料を分析して事実や意見に分けた書き方に慣れていなかったりすることが原因と考えられる。今後は、自分の考えが伝わるように書き方の工夫をしたり、資料などを分析して自分の考えを書いたりする活動も取り入れて行きたい。そして国語の学習で習得した「書く力」を他教科などでも活用できるようにしていきたい。

また、家庭学習においては、ほとんどの児童が宿題を忘れずにしているが、自主学習をする児童は限られている。特に、低学力傾向の児童に関しては、宿題をするだけでも負担が大きく、なかなか自主学習まで手が回らないのが現状である。今年度から行った小中連携会議でも「家庭学習の習慣化は必要不可欠である。」と意見が挙がっていた。家庭学習の習慣化を図るためにも、自主学習の推進にはさらに力を入れていれていきたいと考える。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈良県宇陀市立　菟田野中学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

本校では、長年「基礎、基本的な学力が定着していない」「家庭学習の習慣がついていない」といった低学力傾向の生徒が多く、学習規律の点でも授業への集中力がなく、落ち着いて授業を受けることができない、居眠りをする生徒が多い、など、学力・生活両面で、大きな課題を抱え、そういった課題への対応も、なかなか全校あげて組織的に対応する体制が整わない学校であった。

そこで平成２８年度より、学力向上に向けた取組を行うことで、全校をあげて取り組む体制が次第にできてくる中、生徒が落ち着いて授業を受ける態度や、基礎学力面での向上といった点で、ようやく変化が形として見えてきた。

そこで、本研究に際し、これまでの取組を踏まえながら、より確かな学校変革・学力向上を目指して、実感できる変革を作りだして行こうと、研究の柱として次の二点に重点を置き取組を行った。

①「自主学習ノート」を通した家庭学習の充実。

②「学び合い」（話し合いやグループ活動を行うことで、互いを高め合い、つまずき立ち止まる生徒が参加できる授業を目指す）と「振り返り」を大切にした授業研究。

２．協力校としての取組状況

（１）「自主学習ノート」を通した家庭学習の充実

昨年度は、全校で「宿題」の提出の徹底をはかり、一定の成果をみたが、生徒の実態として、昨年度調査で、「ふだんの家庭学習の時間３０分未満の生徒」が、現２年 40.7%・現３年 33.4%といった、学習習慣が作れていない厳しい状況であった。そこで学習の定着には必須である「家庭での学習の習慣化」を目標として、全学年、学級で、「自主学習ノート」の取組を始めた。（毎日１ページ、自主学習を行ってくる）この取組を通して、生徒の学習に向けた主体的な姿勢を育てたい。

春より一斉に学力向上部として集まる各学級担任が、それぞれ実態の交流や、課題克服の工夫を持ち寄ることで、教師が互いに刺激を受け、工夫を取り入れ合い、更には、それを各学年へ持ち帰って実践を重ねることで、学校として取組の標準化を行うことができた。

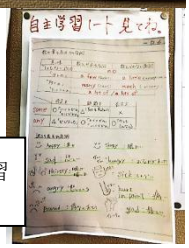
取組の工夫としては、

・生徒へのモデルノートの提示（最初によい学習のまとめ方や方法を例として示す）

・良いノートを適時取り上げ、終わりの会で紹介、学級掲示を行う。この紹介は、できるだけ全員を取り上げるようにしている。
・「今日のベストノート」の表彰。
・スタンプや「できたシール」を貼る。
・コメントの工夫。より深い学びに向けたコメント力が必要。

・いろいろな先生からのコメント。

などがあるが、副次的な効果として教師と生徒とのコミュニケーションツールとして、信頼関係を深めるのに役立ったとの意見も多かった。
課題として出てきたことには、以下のような対応を行った。



教室掲示の「自主学習ノート」

・忘れてくる生徒への対応。→放課後学習を行う。
・自分で学習する方法がわからない生徒への対応。→こちらからプリントなど個人にあった学習内容を与える。

（２）「学び合い」（話し合いやグループ活動を行うことで、互いを高め合い、つまずき立ち止まる生徒が参加できる授業を目指す）と「振り返り」を大切にした授業研究

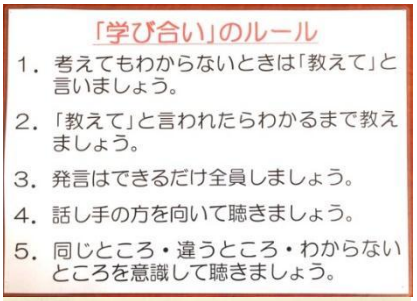
年度当初の実態として、落ち着いて話しを聞けるようになってきたとはいえ、２，３年生の中には、授業への集中力がすぐとぎれ、話しを聞いていない、他の話しをする、居眠りをするといった生徒が見受けられた。その背景には、基礎基本の力の不足から、「内容がわからない」や、学習習慣、学習経験の少なさからくる学習への集中力の不足「勉強の方法がわからない」がある。

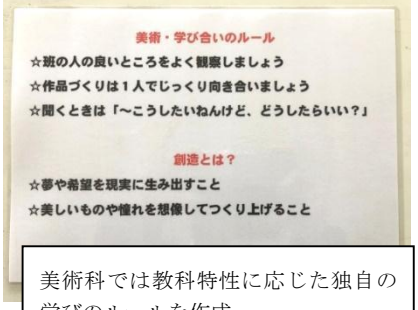
本校生徒は、部活動が熱心で、厳しいトレーニング、練習にも耐える集中力を持っていることから、その学習方法さえわかれば、授業への集中力はついてくると考え、学ぶ「内容や方法がわかる」授業を目指し、まず「学び合い」の方法を取り入れた。

ここでいう「学び合い」は、少人数、３～４人のグループで、互いの交流を通して、以下のようなねらいをもって授業に取り入れる。

・習得した知識の再構成のための「学び合い」をする。
・自分で考え、発言する、人の意見を聴くといった活動を通して、学びを深め、主体性を育てる。
・具体的には、なかまの考えを聴く中で、気づきや、わかったこと、発見、考えの変化や学びの深まりにつなげる。
・一人ひとりが活動していない時間を減らす。そのため、人数を少なくし、３～４人とする。
・わかっていない生徒が、何もしない時間、思考を止めている時間を減らし、理解を助ける活動を目指す。何よりも「学び」をあきらめさせない活動とする。
・教え合うことを通して、わかっている生徒は、人に話し伝えることで、より確かな理解へとつなげる。
・なかまとして、支え合い、人と協力できる集団づくりをする。
・意見のすりあわせや発表といった活動を通して、コミュニケーション力、問題解決能力を育てる。

まず学級で、生徒に「学び合い」を大切にする意義を伝え、そのための活動のルールとして、教室に『「学び合い」のルール』を掲示した。





美術科では教科特性に応じた独自の学びのルールを作成

１学期に行った研究授業では、まだ、こういった班活動に慣れていないため、活動時間がよけいにかかったり、班での「学び合い」の話し合いもスムーズに進んでいなかったりした。

そこから、どの授業でも使えるよう、各学級「学習班」を固定し、できるだけ多くの授業で日常的に、この活動を取り入れることを全職員で確認し進めた。

その結果、２学期では、生徒たちも活動に慣れ、授業中の活動の切り替えがスムーズになり、交流や教え合う活動も、活発によく行うようになった。

その効果として、「苦手意識をもった生徒も参加意欲が出てきて、みんなが活動できる。」「活発な授業につながっている。」「生徒の中に、人と『学び合い』をすることの大切さや自分の意見を言うことの大切さが、これまで以上に芽生えている。」などが教員の実感としてあげられた。

課題としては、説明などがまだ自分の言葉できっちり出来ていない場面が多くあり、理解がまだ未消化なことや人に伝えるコミュニケーション力の課題などが見えてきた。しかし、それもこの活動を通してわかってきたことであり、グループ活動は、目的ではなく方法・手段であることをしっかりと理解し、今後この活動が、ただやっているだけになっていないか、効果的な活動が出来ているかなど、より考えを深める課題や進め方などの研究を進める必要がある。

（３）学力向上に向けた、個別の支援体制の充実を目指す取組

個別の支援体制の充実という点で、全学年、以下のような学習支援の取組を行っている。

・朝の学習の時間(10 分)‥1.2 年は読書、3 年は自主学習講座を行う。チャイム着席で自分たちだけでも静かに読書したりすることで、落ち着いた状態での一日の始まりが身についている。
・夏休み（６日）･冬休み（２日）質問教室‥各自が学習したい教科に取り組む、日頃の「わからない」をなくす取組。日頃一人で学習できない生徒への支援、働きかけができる。
・定期テスト前１週間の放課後‥希望者が教室に残り、自主学習をする。わからないところや質問があれば教師に聞く。つまずきのある生徒への支援、働きかけができる。
・日頃の放課後、学習‥質問がある時、自習したい時（３年）、放課後残って教室で学習、教師に聴くことができる。
・その他、教科ごとに補習を行っている。

「自主学習ノート」と同じく、自分でやることを決め、学習するスタイルを基本としており、生徒の学習への主体性を大切にしている。そういった効果もあり、教師に日常的に質問したりする生徒が増えてきた。

また、別に学校・地域パートナーシップ事業の一環として「うたの土曜塾」を行っている。

対象は３年生の希望者で、地域住民の方（本年は６名の方の応募があった）による学習支援の活動である。本校卒業生の大学生や教職を退職された方などが、ボランティアで３年生の学習支援をして

もらう。すでに７年前から実施しているもので、地域のボランティアの方の、支えが生徒たちにも大切なものとして伝わり、学習意欲の喚起につながっている。この取組からも自分の進路選択に向けた学習習慣の確立につなげたい。

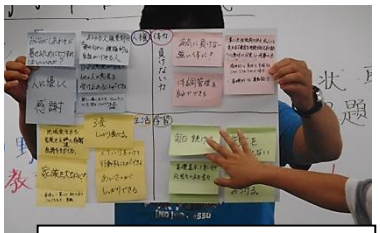
土曜塾　指導には、教員も入る

○ 目的　本校３年生の自主学習習慣の定着及び、基礎学力の定着を目指す。

○ 日時　２学期から３月までの土曜日　午前９：００～１１：００

（４）学力向上に向けた小中連携の取組

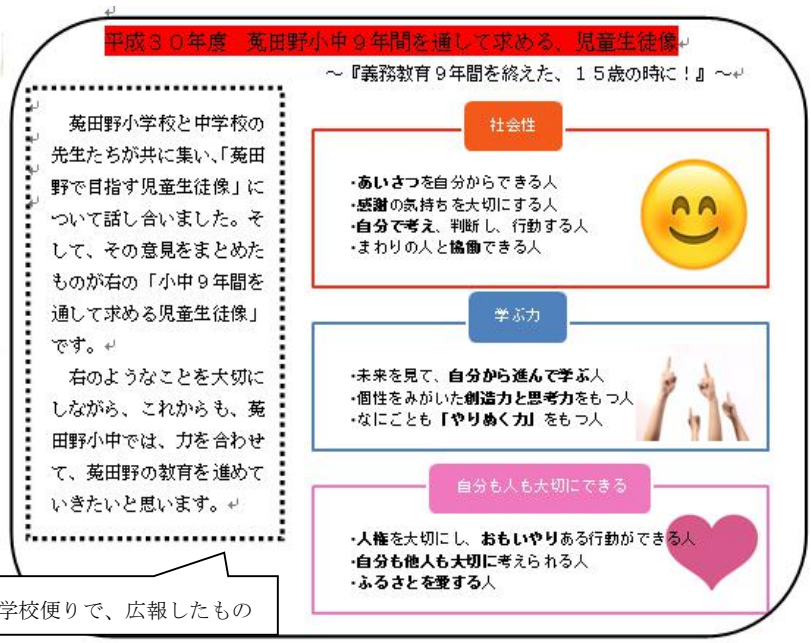
学力向上の取組は、学校・家庭・地域が連動して進めることが、その効果を左右するものである。そのため、学校教育の一貫性を見直し、小中の連携を進めることが、教育効果を高めるためにも重要である。しかし、ここまで菟田野小中での連携は、表面的な活動にとどまり、教育の中身での連携までは至っていなかった。


研修での話し合いの交流の様子

そこで、今年度は小中の教員の交流を進め、そこから組織的に小中連携を進める取組を行った。

① ８月　小中合同研修会の実施‥小中全職員が共に集まり、研修を行った。内容は「自主学習ノート」の取組の交流（今年度小中共にスタートさせた）と「小中９年間を通して求める児童生徒像～義務教育９年間を終えた、１５歳の時に！～」についてで、ＫＪ法でグループごとに意見をまとめ、発表交流を行った。

小中の教員が共に集まる初めてと思えない活発な話し合いが行われ、教員の感想として「とても充実していた、定期的に行うのが良い」など、小中互いに小中連携の意義を感じ、話し合うことで、その効果を実感することができた。また、今後についても前向きで具体的な提案が多く出た。



学校便りで、広報したもの

② 10 月　この時話し合われた内容を集約し、互いの教員で確認をとったあと、小中の学校便りで保護者、地域へ発信した。

③ 11 月　小中代表者会議　今後の小中連携の活動の方針について

④ 12 月　第 2 回小中合同研修　話し合い交流のテーマを三つに分け、人権部・生活部・学力向上部に分かれて話し合い、交流を行った。教員の感想としては「小中の一貫した目標があれば強いつながりとして生徒を育てていけるのではないかと感じました」といった、今後に向けた意気込みを示す意見が多くあった。活発な話し合い交流をもつことができたことを受け、今後より具体的な取組を形にする方向で小中連携を進めて行きたい。

３．取組の成果の把握・検証

〇「自主学習ノート」は、定着し、それと共に家庭での学習習慣は一定ついてきた。〔**資料**〕にあるように、「ふだんの学校以外での勉強時間」は、３学年共に、大きく向上している。

実際に学力面での変化として、学期末テストの各学年、１学期と２学期平均点の推移が次である。

５教科合計	１年	３１９．８	⇒３１０．２	－　９．６
	２年	２７６．９	⇒３０６．８	＋２９．９
	３年	２４６．３	⇒２７４．６	＋２８．３

１年１学期は、比較的わかりやすい内容が多いことを考えれば、全体に向上傾向が見える。

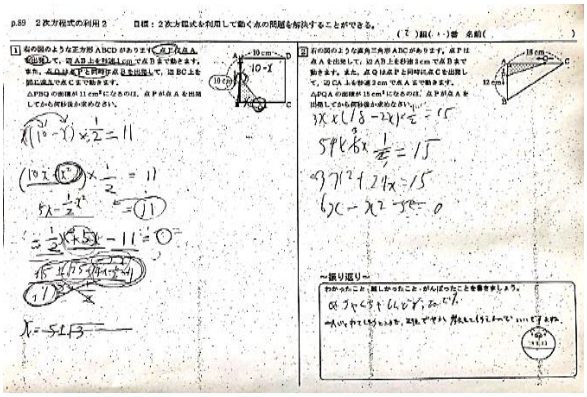
また、補習や学習支援の取組とも重なる成果として、自学自習の活動が、自然に行えるようになって、日頃の教師への質問なども、よくできるようになった。

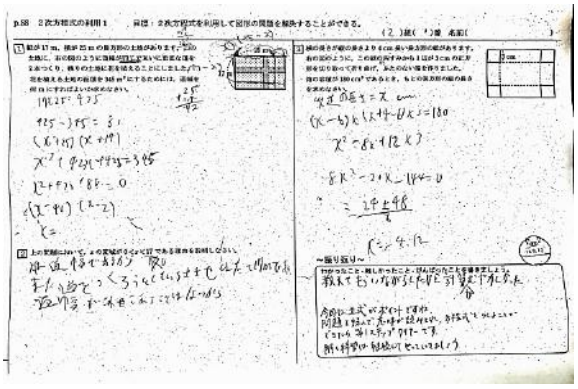
小学校との交流で、小中共に大切にすることなどを、確認できてきたので、それを活かし、小中が連携した指導をすることで、今後より一層の効果が期待できる。

〇 授業での規律が保たれ、生徒の態度も、まだ３年では波があるものの、しっかりと授業に参加し、「学び合い」活動も、よくできるようになっている。逆に、「学び合い」活動の方が、生徒同士で進めるため、まとまりがあるときさえあり、一斉授業では、うつむいていた生徒が、学習班になると、しっかりと参加し、話し合いながら学習を進めている姿があった。授業中の３年生からも「わかる」「楽しい」といった言葉がよく聞けるようになった。これは、授業のわかりやすさと強く連動していると感じられる。

〇３年数学では、特に「学び合い」活動を積極的に取り入れた結果、「数学が好き」という生徒の割合が大幅に増加した。〔肯定的４月 41.3%⇒１月 58.6%（市生活行動学習活動調査）〕

〈３年生のＡの数学練習プリント〉９月





・これまでは、「わからない」といった理由で、白紙や提出すらしないことが多かった３年生のＡだが、式をたて、解き方でつまずいても、教えてもらって解くことができた過程がわかる。

〇「学び合い」の活動がスムーズにできるようになり、わからないこともすぐに聴いたり、教えたりする姿がある。人にわからないと言うことは、大きな抵抗があるものだが、それが各学級で活発に行えている。この活動は、信頼できる学級のなかま集団があって、初めて成立するもので、これまで本校で伝統的に重視し取り組んでいる人権学習の取組が、人を大切にし、なかまで支え合う姿勢を積極的に行う活動として、学習態度の中でも生きてきている。

〇 小中連携の活動を進めることができた。実際に教員が動き、互いに意見交流をする機会ができたことで、指導者である教員それぞれに義務教育９年間としての、教育の視野が広がり、全体で方向性を合わせ、何を大切にするかの意識が出てきたように思う。今後この小中連携を、定期的なものにし、実践につなげたい。

４．今後の課題

○ 規律ある授業は、わかる授業からであることを改めて学校全体で共通認識し、更なる授業実践の研究を進める必要がある。「学び合い」は、あくまでも活動方法であるので、それを通したより「わかる」授業、より「おもしろい」授業を目指し、授業力をあげるための研修、研究を進めたい。特に、主体的で深い学びのためには、生徒にいかに考えさせるかを大切にする必要があり、そのための方法として、話し合い後の、「書く」活動を重視し、「書く振り返り」もあわせて研修を深めたい。

○ ２・３年生国語科の分析では、「書く力」に比べて、「話すこと・聞くこと」（２年生 75.5 全国 81.1/３年生国語 B 70.1 全国 76.6)「読む力」(２年生 49.5 全国 53.5/３年生国語 A 70.7 全国 76.7)が全国平均を大きく下回る結果である。数学科の分析でも、文章を読むところでのつまずきがみられ、読解力の向上が課題である。学力向上の基礎を高めるためにも、国語科だけでなく全ての教科を通して「読む力」「話す力・聞く力」を丁寧に指導し、底上げしていく必要がある。

○ 学習への取組は、大きく二極化しており、２年生はその傾向が強い。そのため、学習をしていない、できない生徒への対応が大きな課題である。「自主学習ノート」を続けつつ、特に今年度同様、基礎基本のつまずきをできる限りなくす取組を進めたい。同時に、自分で計画を立てて進めることができるよう、生徒の主体性を伸ばし、より確かな学力向上へつなげたい。

○ 小中連携はようやくその途についたばかりである。しかし、その効果は小中それぞれの教員が実感できるものであり、今後の連携強化に期待を持たせるものがある。次年度、より具体的な実践として形にしていきたい。

【資料】〔H30.4 月〕全国学力学習状況調査(３年)･宇陀市生活行動･学習活動調査(２年)･県学力学習状況調査 (１年)と〔H31.1 月〕宇陀市生活行動学習活動調査の比較

３年

ふだんの学校以外での勉強時間	４時間以上	４時間～３時間	３時間～２時間	２時間～１時間	１時間～30分	30分～	全くしない	合計
平３０年４月 %	3.4	17.2	24.1	20.7	13.8	20.7	0	100
平３１年１月 %	44.8	10.3	6.9	10.3	17.2	10.3	0	100

家で自分で計画を立てて勉強する	している	どちらかといえばしている	あまりしていない	全くしていない				合計
平３０年４月 %	6.9	27.6	48.3	17.2				100
平３１年１月 %	17.2	34.5	27.6	20.7				100

〔肯定的〕
34.5%⇒51.7%
＋17.2%

〔２時間以上〕
44.7%⇒62%
＋17.3%

数学の勉強は好き	すき	どちらかといえばすき	どちらかといえばきらい	きらい				合計
平３０年４月 %	10.3	31	31	27.6				100
平３１年１月 %	27.6	31.0	24.1	17.2				100

〔肯定的〕
41.3%⇒58.6%
〔否定的〕
58.6%⇒41.3%
－17.3%

2年

ふだんの学校以外での勉強時間	４時間以上	４時間～３時間	３時間～２時間	２時間～１時間	１時間～30分	30分～	全くしない	合計
平３０年４月 %				7.4	44.4	18.5	29.6	100
平３１年１月 %			15.4	15.4	38.5	23.1	7.7	100

家で自分で計画を立てて勉強する	している	どちらかといえばしている	あまりしていない	全くしていない				合計
平３０年４月 %	肯定的 51.8（14人）		否定的 48.2(13人)					100
平３１年１月 %	11.5	23.1	57.7	7.7				100

〔１時間超〕
7.4%⇒30.8%
＋23.4%

1年

ふだんの学校以外での勉強時間	４時間以上	４時間～３時間	３時間～２時間	２時間～１時間	１時間～30分	30分～	全くしない	合計
平３０年４月 %			5.3	21.1	39.5	21.1	13.2	100
平３１年１月 %	7.7	10.3	33.3	33.3	15.4	0	0	100

家で自分で計画を立てて勉強する	している	どちらかといえばしている	あまりしていない	全くしていない				合計
平３０年４月 %	15.8	47.4	18.4	18.4				100
平３１年１月 %	20.5	43.6	28.2	7.7				100

〔２時間超〕
5.3%⇒51.3%
＋46%
〔30分未満〕
0%

（様式３）

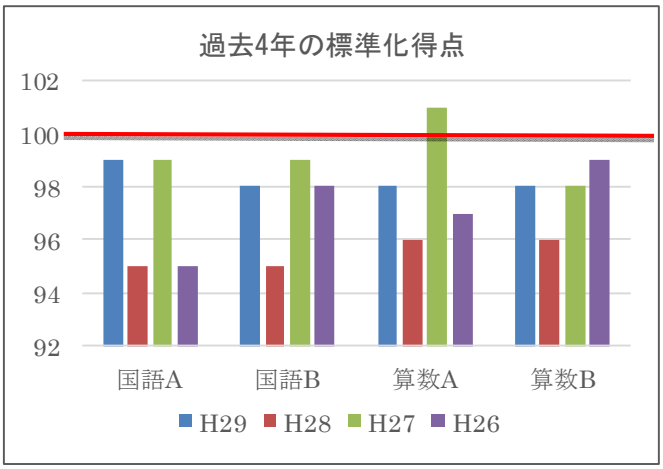
「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	平群町立平群小学校

１．協力校における学力の現状と課題



平成 26 年４月、平群小学校として開校５年目を迎える。家庭環境や生徒指導上の課題をもつ児童が多く、課題解決に追われる状況が続いている。開校以来全国学力・学習状況調査の教科に関する調査結果が全国平均を上回ったことはほとんどなく、低学力傾向がなかなか改善できない。これは、基礎的・基本的な内容が定着しきれていないことに起因している。教科に関する調査の結果を見ると二極化が見られ、中位層の児童もどちらかと言えば低位に厚く分布している。

低学力傾向にある本校の学力に関する現状と主な課題は以下の通りである。

〇無回答率の高さ

題意を理解できなかたり最後まで集中力が続かなかったりするため、全国平均と比較して無回答率が高い傾向がみられる。問題を読み取る力とともに、最後まで粘り強く取り組む力を身に付けさせなくてはならない。

〇書く力

記述式問題の正答率が低く、根拠を基に自分の考えを説明したり、書いたりして発信する力が弱い。児童質問紙調査によると、普段の授業でそうした活動は行っていると回答している児童は少なくないが十分に身に付いていないと考えられる。

〇家庭学習

児童の学習習慣を帰宅後の家庭学習でみてみると、30 分未満の児童が少なからずいる反面、通塾して３時間以上学習しているなどここでも二極化がみられる。これまで家庭教育の定着・充実を図るため「家庭教育の手引き」を作成し、配布・啓発してきているが、十分に浸透していない。

〇学習規律、規範意識

学習内容が理解しきれず、手遊びをしたりおしゃべりをしたりして授業に集中できない児

童がいる。また、学習規律が定着していない傾向も見られる。さらに、自分の思いをうまく伝えられず、きつい言葉を発したり手が出てしまったりするなどの行動に結びつくため、トラブルを生む基となっている。学習規律を高め、コミュニケーション力を高めることが必要である。

このように、総じて低学力傾向にある本校の実態であり、課題は多いが一つずつ取り組んでいくことが必要であると考えている。

２．協力校の取組状況

【研究主題】

児童一人一人の確かな学力の向上を目指す

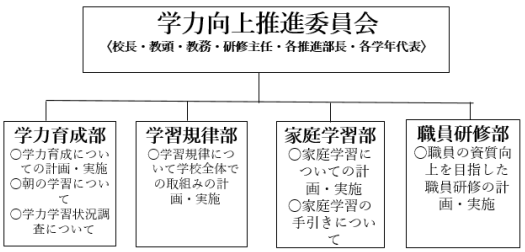
～基礎・基本の定着を図り、自ら主体的に学ぼうとする児童の育成を通して～

課題は多岐にわたる。上の研究主題をもとに次の４点を取組みの柱とした。

・確かな学力の育成（基礎・基本を定着させる取組み）
・家庭学習の充実
・学習規律の確立
・教員の指導力を高める取組み

【現在までの本校の取組み】

〇学力向上に向けての校内組織の構築



まず、研究推進にあたり、右図のような学力向上に関わる校内組織を立ち上げた。また、本校ではこれまでから生徒指導上の課題に追われ、個々の取組みに関連性をもたせられていなかった。そこで一つ一つ確認をしながらそれぞれの柱に沿って取組みを進めた。

（１） 確かな学力の育成（学力育成部）

まず学力とは何かを考えるにあたり、「各学年で重点を置くこと」について話し合い、昨年度まで力を入れて取り組んできた「話す・聞く」のスピーチと朝学習で取り組んでいる四則計算について系統性をもたせることを確認した。

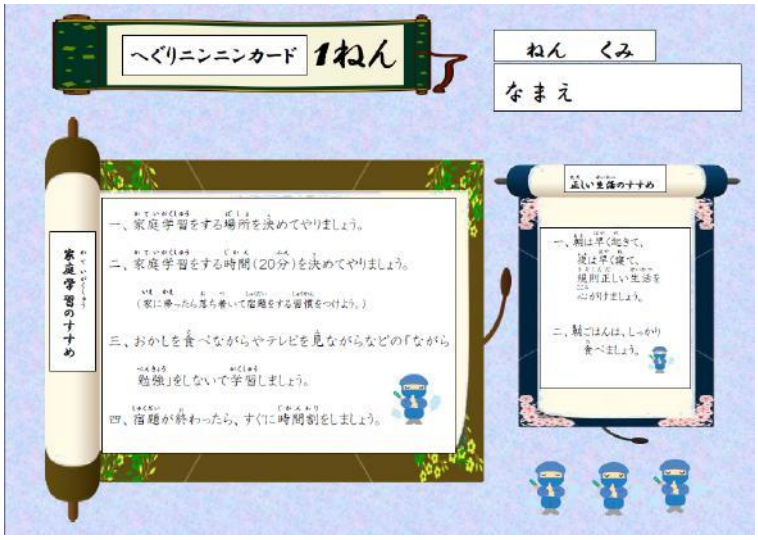
	１年	２年	３年	４年	５年	６年
スピーチ	２文～３文	３文～４文	書いたものを元に15秒	５文程度	メモを使って７文程度	メモを見ないで１分
四則計算	たし算 ひき算	九九 くり上がり くりさがり のあるたし算、ひき算	あまりのあるわり算 ３位数×２位数の筆算	わり算 ２・３位数÷１、２位数	小数のわり算 同分母の分数の計算	小数、分数、整数の四則計算

また、基礎的・基本的な学習内容の定着から始めることが必要と考え、「読み」「書き」「計算」「作文」に重点を置いて取り組むこととした。

実際に指導するにあたり、若手や中堅教員を中心に全体指導や理解に時間のかかる児童への指導への手立てについて研修を望む声が上がり、実践交流会を開くことにつながった。学級づくりや授業をする上で大切にしていること、重点課題についての指導方法や実践などの交流は有意義な時間となり、ヒントを得ることができた。

（２） 家庭学習の充実（家庭学習部）

これまで、本校で作成した「家庭学習の手引き」を家庭訪問時に配布し、家庭学習の重要性について保護者に説明してきたが、継続性に欠ける面が見られた。そこで、昨年度から家庭学習や宿題の提出チェックを行ない、実態把握に取り組んだ。従来の手引きは文字が多く、活用しづらいとの意見を受け、今年度は内容を刷新し、簡略化したものに作り替えた。今年度は試行的に使用しており、その結果を踏まえて次年度すべての学年で配布し、定着を図る予定である。



へぐりニンニンカード

（３） 学習規律の確立（学習規律部）

生徒指導上の課題から、教室に入りにくかったり学習上のルールが守れなかったりする児童が目立った。そこで、まず大事にする学習規律として、「チャイム着席」「授業始めの挨拶」「返事」「学習用具の準備」「上手な聞き方」を大切にしていこうと確認した。

また、「低い規範意識」「自尊感情の低さ」も大きな課題であった。児童の規範意識を高めるには、自分たちでどうすればよいか考えることが大切ではないかと考え、毎月の生活のめあてを学級単位で具体化し、全校集会でその振り返りを発表することにした。

さらに自尊感情を高める取組みとしてお互いのよいところを認め合い、励まし合う言葉を増やそうとして「元気のなる木」に取り組んだ。これは、言われてうれしかった言葉、励ますときにかけてあげたい言葉を紙に書き、貼っていくものである。児童のなかには、書かれている言葉を使ってコミュニケーションを図る姿がみられるようになった。

（４） 教員の指導力を高める取組み（職員研修部）

本年度、若手教員育成研修の拠点校となったこともあり、２、３年目の若手教員が時間を惜しんで教材研究をしている姿が日常的に見られた。その姿に触発されたのか、昨年度と比

較して多くの研究授業が公開され、普段から授業に関わって教員同士が話し合う姿が今まで以上に見られるようにもなった。

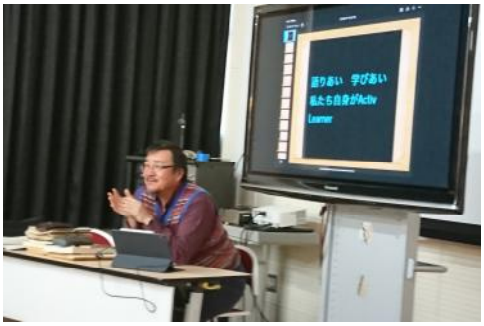
また、「ベテランの先生方の授業の見方、指導へのこだわりを聞いてみたい」「お互いの授業を見せ合って参考にしたい」という教員の声が自然発生的に生まれ誕生したのが、参観ウィークと平群塾である。

・参観ウィーク

「決められた期間は時間の空いたときにどの授業を見に行ってもよい。ただし、参観したら何らか感想や意見を授業者に伝える。」というルールだけを決めて始めた。刺激しあうことが授業改善につながっているのではないかと考えられる。

・平群塾

毎回一人の教員が自分のこれまでの指導上のこだわり（大切にしてきたこと）や自慢できる実践を発表し、参加者が意見を交換するという取組みである。なかなか時間がとれずにいるが、こうした機会を開きたいという声が教員の中から上がったことは今までなかったことである。



３．実践研究の成果

学習に関するアンケート結果（平成 31 年１月実施）は次の通りである。この結果を基に考察したい。

児童アンケート　（単位　%）

質問項目	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	無回答
授業はよく分かる	52.0	36.4	7.3	3.6	0.7
分からないときは先生や友達にたずねる	45.0	30.8	12.9	10.9	0.3
自分の考えや意見を進んで発表している	25.8	32.5	28.8	12.3	0.7
家で計画的に学習をしている	50.0	26.5	14.9	7.6	1.0
学校や学級の決まりを守っている	40.7	43.7	11.9	3.3	0.3
自分にはよいところがあると思う	45.4	35.8	8.9	8.6	1.3

教員アンケート

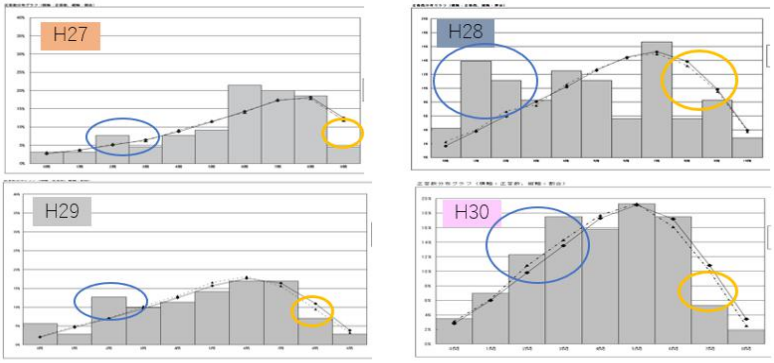
質問項目	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	無回答
分かりやすい学習指導をしている	11.8	82.4	5.9	0.0	0.0
発表や話し合いを取り入れている	29.4	52.9	11.8	5.9	0.0
学習意欲が高まる工夫をしている	23.5	58.9	17.6	0.0	0.0
家庭学習の定着に取り組んでいる	35.3	58.8	5.9	0.0	0.0
学校生活でルールを守るよう指導している	38.9	50.0	11.1	0.0	0.0
自尊感情を高める取組みを行っている	27.8	72.2	0.0	0.0	0.0

（１）低学力傾向児童への指導

今年度の全国・学力学習状況調査の結果を含め、過去４年間の教科に関する調査の正答率の分布をみると以下の特徴があることが分かった。（下図は国語Ｂの傾向）

・例年、平均正答率より低く、分布も全体に左に（低い方に）寄る傾向にある。

・どの年度、どの教科も、平均より少し低い層に厚みがあり、平均より少し高い層のところに落ち込みがある傾向がある。



そこで、今年度最下位層の児童について、児童質問紙の回答状況を検討した。

すると、毎時間の授業内容の理解には相当の困難さが予想されるにもかかわらず「自分にはよいところがある」「先生に認めてもらっている」「算数は大事だから、あきらめずにがんばろうと思う」「授業が楽しく分かる」と考えていることが分かった。これは、教員が「小さな頑張りを認める」「学年の内容にとらわれず、児童の理解度にあわせた学習をする」「達成感を味わわせる」などの姿勢で児童にかかわるという取組みが関係していると考えられる。

このように、最下位層を引き上げる手立ては一定の成果を見せていると考える。しかし、平均正答率を少しだけ下回る児童や平均正答率を少し上回る児童の学力をさらに伸ばすにはどうすればよいか、という点に注力することが次年度の取組みの方向性として挙げられる。

（２）確かな学力の育成・授業づくり

上のアンケート結果から、学習指導については学習意欲が高まる工夫をすることで、児童が授業はよく分かるととらえていることが分かる。教員の研修を工夫し、互いに学び合う機会を設けたことがつながったととらえたい。しかし、教員は発表や話し合いの場を設けていると考えているが、児童は進んで発表できていないと考えているという結果が見られる。学びあい、話し合いなどは授業でよく用いられる言葉であるが、何のために話し合うのかというねらいを明確にして位置付けたい。そして、また、進んで発表したくなるような学級集団づくりを進めたい。

（３）家庭学習

家庭学習の定着にはほとんどの教員が取り組んでいる。しかし、児童が計画的に学習している割合は高くない。家庭学習の手引きを作り替え、今年度は試用段階である。学力向上のために家庭学習の定着は欠かせないととらえている。児童の反応を見極めながら、新たな手引きを作成し、保護者へも啓発していきたい。

（４）規範意識、自尊感情

規範意識については、教員は意識して指導しているが引き続きの指導が必要である。特に学習規律については、すべての教職員が同じ指導ができるよう共通理解を図りたい。また、自尊感情については、教員の取組みに反して児童は否定的な児童も見られる。引き続きの取組みが必要である。

（５） 教員の指導力の向上

今年度の取組みを通して、教員の中から学びたいという意識が芽生えたと感じられる事が多く、新たな取組みも始まった。児童の変容にはまだ結びついたと言えないが、種をまくところまではできたと思う。具体的にポイントを絞って取り組んでいきたい。

４．今後の課題

本校の学力向上の取組みが目指すのは「持続可能な学力の向上」である。つまり、目先の結果を求めるのではなく、児童の中に「できた」「分かった」という達成感や成就感を味わわせること、「なんで？」「もっと調べてみたい」という意欲を高めることを目指している。今年度の取組みを振り返ると、児童に働きかけるものよりもむしろ教員の意識を変えたり、取組みの変容を促したりしたことが多い。指導力を高め、「学ぶことが楽しいという雰囲気を醸し出す教員」であるための「地ならし」に時間を割いた面がある。

また、研究の重点を特定の教科、特定の観点とせず、広く取り組んだ。このことは、個々の自由度が高かった反面、焦点化されず取組みがぼやけたことも否めない。

次年度は、研究の教科や観点を焦点化し、力点を置いた取組みを進めたい。

また、正答率の分布から見えた「平均点を少し下回る層」「平均点を少し上回る層」に対してどのような手立てを講じればよいか、検討していきたい。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	２９

協力校名	奈 良 県 平 群 町 立 平 群 中 学 校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

本校は、平群町内唯一の中学校であり、３つの小学校区から生徒が登校している

校区は農村を中心とする従来型の地域社会と新興住宅地の両方から成り立つ。経済基盤、生活基盤の多様な家庭が混在する地域性により、経済的要因等で厳しい生活環境に置かれている生徒が少なくない。また、家庭の教育力低下等で、基本的生活習慣や生活規範が十分に身に付いていない生徒も少なくないなど、多種多様な課題が見られる。このような背景から、生徒の学力、学習意欲に大きな差異がある。実際に、全国学力・学習状況調査等において平成27年度までの本校結果は、国語ＡＢ、数学ＡＢのすべてに全国や県平均を下回っていた。これが、平成28年度からは全てにおいて本校生徒結果が県・全国より僅かながら上回るようになってきた。平成30年度の結果が国語ＡＢが僅かに下回ったものの数学ＡＢでは僅かに上回っていた。

本校は平成26年度まで、授業中であっても教室から抜け出し廊下で担当教員から説諭を受ける生徒や、教科によっては居眠りや私語、ふざけあい等落ち着いた学習状況が成り立っていない様子が見られた。問題行動や生徒指導上心配な様子が見られる子どもたちに共通することとして、自己肯定感が低く自分に自信をもてないことや、何事にも消極的で否定的な考え方をしてしまうことなどの課題があった。また、そこには自分の気持ちをことばで伝えられないことや他人の話をしっかりと聞き取ったり理解したりすることが苦手であることに大きな要因があった。

そこで、子どもたちのコミュニケーション力を高めることを最重要課題として据え、「言語活動の充実を目指す授業」を平成27年度がら取り組んだ。また、教員の授業研修の必要性から研究授業を実施し全職員で取り組んだ。

その結果、生徒の話し合い活動や授業中の発言の機会等は徐々に高まってきたが、まだまだ学力の二極化は顕著であり、家庭での学習習慣や基礎学力の未定着さが見られ憂慮すべき現状にあり、引き続きの課題として取り組んでいる。

２．協力校としての取組状況

【研究主題】

生徒一人一人の「確かな学力」の向上を目指す

～言語活動の充実等により、生徒の対話を重視した

協働的な学びを促す授業の推進～

全ての教科において、生徒が主体的・意欲的に取り組み、「分かった」「できた」「発見した」等、生徒のつぶやきや生き生きとした表情が垣間見られる授業を実践・展開するように、以下に取り組んでいる。

(1) 集団で学ぶ意義やルールを理解させるとともに、「生徒同士が学び合う活動」を積極的に取り入れるなど、生徒が主体となった授業の展開に努める。

①基礎的･基本的な知識及び技能を習得を図る。

②生徒のコミュニケーション力（言語活動の充実）を高める。

・男女で座る座席(通年)やグループ、座席の前後で相談し合う生徒相互での話し合い活動や生徒相互で教え合う活動を習慣化させるような授業の展開を心掛けた。

(2) 生徒が「見通しをもって学ぶこと」「振り返り（自己評価）すること」ができる授業の展開に努める。

①授業のはじめに(めあて・ねらい)を明確に示すとともに、その理解度や達成度を確かめる取組に努める。

(3) 授業研究への取組や教科研修会等への参加など、授業力の向上を目指し研鑽に努める。

①校内研究授業の取組。

②１年間を通じてお互いの授業を参観し合い、スキルアップへとつなげる。

・生徒にとって、「学ぶ楽しさ」や「わかる(発見できる)喜び」等、主体的に学ぶ意欲が高まるような授業展開ができるように、授業参観ウィークを活用して授業研修を行い授業力向上に向けた研究を行った。

【研究授業の様子】

(4) 評価方法について見直しを行う。

①各教科における「評価規準」及び「評価基準」の点検、見直しを行う。

・生駒郡内各中学校における、評価方法や評価規準・基準について情報交換を行い、本校の評価方法の点検を行い、評価規準及び評価基準を見直し評価方法の明確化(生徒と保護者への公開)に向けて研修している。評価方法の公開が、生徒自身もどれだけ目標を達成できているか確認ができたり、目標を達成して自信がついたり、新たな改善点を見つけられたりできると考えている。

【グループ別研究討議の様子】

(5) 町教育委員会が主体となり、小・中学校が連携し、町の子どもたちの実態から見える課題の解決に向けての取組を推進する。

・町内の全国学力・学習状況調査結果分析報告会を通して、課題を確認し合い解決に向けた新たな取組を見出した。

３．取組の成果の把握・検証

平成30年度の全国学力・学習状況調査の平均正答率は、数学が全国や県平均を上回ったものの、国語、理科については僅かに下回っている。しかしながら、１年生時の奈良県学力調査の状況に比べて正答率が上がった。

本校の、『生徒一人一人の「確かな学力」の向上を目指す』ための課題実現のために行ってきた実践の成果であると考えられる。

その具体的な方策として、『元気で活気に満ちあふれてた学校づくり』をテーマに、「生徒の学ぶ意欲を高めるために」「楽しい学校づくり(学校の活性化)のために」について取り組んだ。

《全国学力・学習状況調査の平均正答率の比較》

	H30			H29			H28			H27		
H30（127人実施）	本校	県	全国	本校	県	全国	本校	県	全国	本校	県	全国
国語Ａ[主として知識]	73.8	75.6	75.9	79.1	77.5	77.5	76.7	75.9	75.6	71.1	76.2	75.8
国語Ｂ[主として活用]	58.9	60.0	61.1	74.4	71.1	72.2	67.8	65.5	66.5	60.7	65.1	65.8
数学Ａ[主として知識]	68.1	66.1	66.1	67.2	65.0	64.7	66.7	63.6	62.2	61.1	65.3	64.4
数学Ｂ[主として活用]	46.4	46.4	47.1	49.3	48.0	48.0	44.4	44.2	44.1	38.8	41.7	41.6
理　　科	62.2	64.1	66.3	-	-	-	-	-	-	46.8	51.6	53.2

(1) 生徒の学ぶ意欲を高めるために

①「学ぶ楽しさ」や「わかる（発見できる）喜び」など、「主体的な学び」の推進に努め、研鑽する。

・「安心して学べる環境」「間違ってしまった回答・発言等をあたたかく受け入れられる環境」「授業中に心地よい声が飛びかう環境」づくりに努め研鑽した。

・生徒の話し合いや男女の協力等を育みやすい環境を設定することで、生徒が自然に話せ、相談できる環境ができ、自分の意見や考えを他人に伝え、聞く習慣ができてきた。

②ＩＣＴ機器を使った授業づくりを研究する。

・デジタルカメラの利用やデジタル教科書を活用すること等、ＩＣＴ教育の推進の基盤をつくるように努めた。

③生徒が自らの能力を発揮する場面や手法を取り入れる。

・生徒相互での話し合い活動や生徒相互で教え合う活動を習慣化させるような授業を展開した。

④互いの授業を参観しあう取組

・生徒にとって、わかる喜びや学ぶ意欲が高まるような授業展開ができるように研鑽した。

・互いの授業を参観し合うなどして、教師としての「話術」を高められるように努めた。

(2) 楽しい学校づくり(学校の活性化)のために

①生徒会活動(本部役員、各委員会活動)の活性化

・生徒会活動等、授業だけでなく行事などあらゆる場面で、生徒自身が活躍する場面や存在感を示す機会を随所に設けることで、自発的な取組や生徒が主体となった活動が増えてきた。

・「どんな学校にしたいか」を常に問い掛けながら、授業や行事に取り組んだ効果として、生徒たちの心に「自分たちが学校を創っていく、機能させていくということは、自分たちでやっていかなければならない、やっていける。そして、みんなで支えていこう。」という意識が現れてきた。この意識の現れは、規範意識の着実な芽生えになり、学校の秩序の維持になってきた。

②ぬくもりのある学校環境づくり

・学校内の掲示物を増やし温かな環境づくりに努めることで、生徒を大事にする心を伝えることができてきた。

このような具体的な実践によって、その成果が表れてきていることも多く見られた。

しかしながら、平成30年度の全国学力・学習状況調査の教科学力の「国語Ａ：主として知識」の結果で正答数が低かった生徒に注目したとき、「重点的に指導すべきと考えられる問題」として、漢字を書く・内容を読み取る・考えを述べる・漢字が読めないの項目があげられた。そのことからも分かるように、「読む → 書く → 理解する → 考える → 説明する」といった、それぞれの『力』や『流れ』が乏しいことが伺えた。

また、その生徒たちの生徒質問紙調査を見てみると、家庭学習の活動や習慣の未定着さが見られ、家庭学習の習慣を定着させる活動が不可欠であることが分かる。加えて、じっくりと粘り強く学習する習慣や学習したことを活用する習慣が身についていないことも分かった。さらには、自尊感情や自己肯定感、自己有用感が低く、地域への愛着や感謝の心も薄いことが分かった。

４．今後の課題

今年度の取組を次年度も一層充実させて行うとともに、「思いやる力」の育成、「自立のための力」の育成、「考える力」「説明する力」の育成を目指した取組を行っていきたい。

これらの『力』の育成は、これからの時代を生きる子どもたちにとって欠くことのできない力であると考える。

また、自尊感情を高めることは、最重要課題として取り組む必要性があると考える。

そこで、今後の課題として、「学校に行くのが楽しいと思える生徒を増やす」「言語活動の充実」についての取組を行いたいと考える。

(1) 学校に行くのが楽しいと思える生徒を増やす

・生徒自身が活躍する場面や存在感を示す機会を随所に設け、援助することで、居場所ができ、信頼感が高まることになり、「つながっている」という安心感を育てていくことができると考える。

(2) 言語活動の充実

・自分の考え、思いを発表・表現する機会を設け、思考力・判断力・表現力を育成することで、主体的に学習に取り組む態度を養っていくことができると考える。

・全国・学力学習状況調査の結果から外すことができないのは、文字に触れる機会を増やすことである。読書を推奨していきたいと考える。